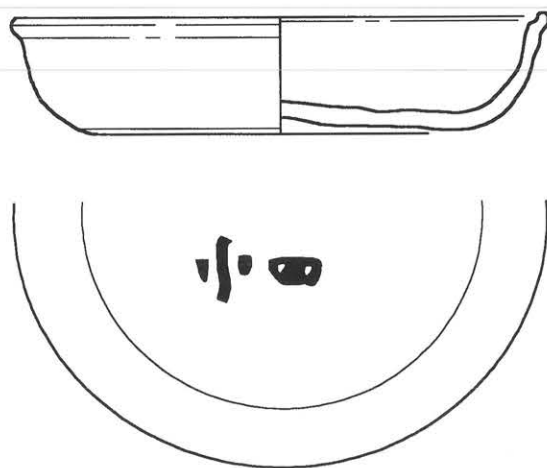


共同住宅建設工事に伴う

美園遺跡第1次発掘調査報告



美園遺跡出土墨書土器「小四」

2001.3

財団法人東大阪市文化財協会

目次

例言	1
1 はじめに	3
2 美園遺跡の周辺環境	3
3 調査の概要	6
3.1 Pit.4	7
3.1.1 Pit.4の層序	7
3.1.2 遺構と遺物	7
3.2 Pit.1	13
3.2.1 Pit.1の層序	13
3.2.2 遺構と遺物	13
3.3 Pit.2	21
3.3.1 Pit.2の層序	23
3.3.2 遺構と遺物	25
3.4 土取り穴	33
3.4.1 土取り穴の層序	34
3.4.2 遺構と遺物	34
4 まとめ	36
4.1 遺構	36
4.2 遺物	37
参考文献	38
報告書抄録	40

例言

1. 本書は平成8年度に財団法人東大阪市文化財協会（以下協会）が大倉建設株式会社の委託を受けて実施した、共同住宅建設に伴う美園遺跡第1次発掘調査の結果報告である。
2. 現地調査は、平成8年4月16日から平成8年6月5日まで実施した。
3. 調査は、池崎智詞が担当した。現地調査には、調査補助員として加茂靖通・藤原俊明が参加し、本書作成には、整理補助員として中野恵子・西村慶子・東口一彦・前田秀則・山村然三・山崎和子（敬称略・五十音順）らが参加した。
4. 本書は、池崎が執筆・編集した。
5. 遺構写真および遺物写真の撮影は池崎が行った。
6. 調査地の基準点設置は株式会社サンヨーに委託して行った。
7. 出土した墨書土器の赤外線撮影については、奈良国立文化財研究所専門員佃幹雄氏（当時）の指導により、池崎が撮影した。また文字の判読については、奈良国立文化財研究所資料調査室技官古尾谷知浩氏（当時）にご教示を頂いた。
8. 今回の調査では、発掘調査に係る掘削工事の予算を含んでいた為、協会が元請けとなり、株式会社サクラ建設工業にその工事を発注し行った。
9. 出土した遺物に関して、財団法人長岡京埋蔵文化財センターの小田桐淳・木村泰彦・中島皆夫・原秀樹諸氏（敬称略・五十音順）にご教示頂いた、記して御礼申し上げます。
10. 現地調査に際して、大倉建設株式会社のご協力をいただいた、記して御礼申し上げます。

1 はじめに

美園遺跡は、近隣の八尾市域では昭和50年(1975年)大阪府教育委員会(以下府教委)が行った、府道大阪中央環状線敷地内(以下中環敷地内)での発掘調査以来、既に周知の遺跡として発掘調査が行われてきた。東大阪市では、平成8年にはじめて発掘調査を行った遺跡である。

昭和55年(1980年)9月、近畿自動車道建設に伴う範囲及び深さの確認調査が、中環敷地内で府教委によって実施された(以下府1次)。結果南北600m、現地表面下約4mの深さまでに、弥生時代前期から近世まで複数の遺物包含層の存在が明らかになった。同年12月から行われた発掘調査(以下府2次)では、弥生時代前期後半と古墳時代前期の集落の中心部分などが確認された。

同時に府2次の調査では、検出した古墳時代前期の古墳の周溝から、2点の家形埴輪が出土したことで注目された。中でも、入母屋造高床住居を模した家形埴輪は、床とベッド状施設など、住居内部の様子が精巧に作られていたことから、当時の室内の様子を再現できる資料として、その価値が高く評価され、美園遺跡の名は広く世間に知られるようになった。

以後美園遺跡は、府教委と八尾市教育委員会の調査成果を合わせると、南北約600m、東西約500m以上の広がりを持つことが推定され、南北に隣接する、友井東遺跡や佐堂遺跡との重複も踏まえた、さらに大きな範囲も想定されるようになった。

今回広域開発(東大阪市では500m²以上の開発)に伴う試掘調査(現在は行われていない)によって、遺跡の確認をした東大阪市教育委員会(以下市教委)は、原因者と二者で協議した結果、1.マンション建設の本体部分の調査は行わず、付帯施設のみ調査を行うこと。2.試掘の結果を重視し、調査掘削深度を最大2m(機械掘削1.3m・人力掘削0.7m)とすること。3.当時未完成であった、積算根拠に基づき積算された、調査経費を導入すること。4.発掘調査に伴う機械掘削は市教委が行うこと。などを取り決めた後、発掘調査を協会に依頼した。

遺跡の新規発見を試掘時点で聞いた協会は、調査地点が府2次調査地点とは直線距離で約300mと近接していることから、美園遺跡の西への広がりおよび、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物の検出が想定された。しかし、上述のとおり、協会に調査の依頼がきた時点ですでに、調査範囲・掘削深度・調査期間について、動かしがたい状況であったため、当地では2m以深にあると想定された、当該期の遺構・遺物は検出できなかった。また、工事によって破壊される本体部分についても、遺構・遺物の広がりはわからなかった。ただし、攪乱掘削後の断面や、側溝掘削のため部分的に調査掘削深度を超えた部分からは、当該時期の遺物や遺構の痕跡を確認した。

今回の調査では、上層部にあたる奈良時代末～平安時代の遺構面・包含層の遺存状態が比較的良好であり、溝を中心とした遺構や、墨書土器4点を含む多くの遺物を検出した。本書では、その成果について報告する。

2 美園遺跡の周辺環境

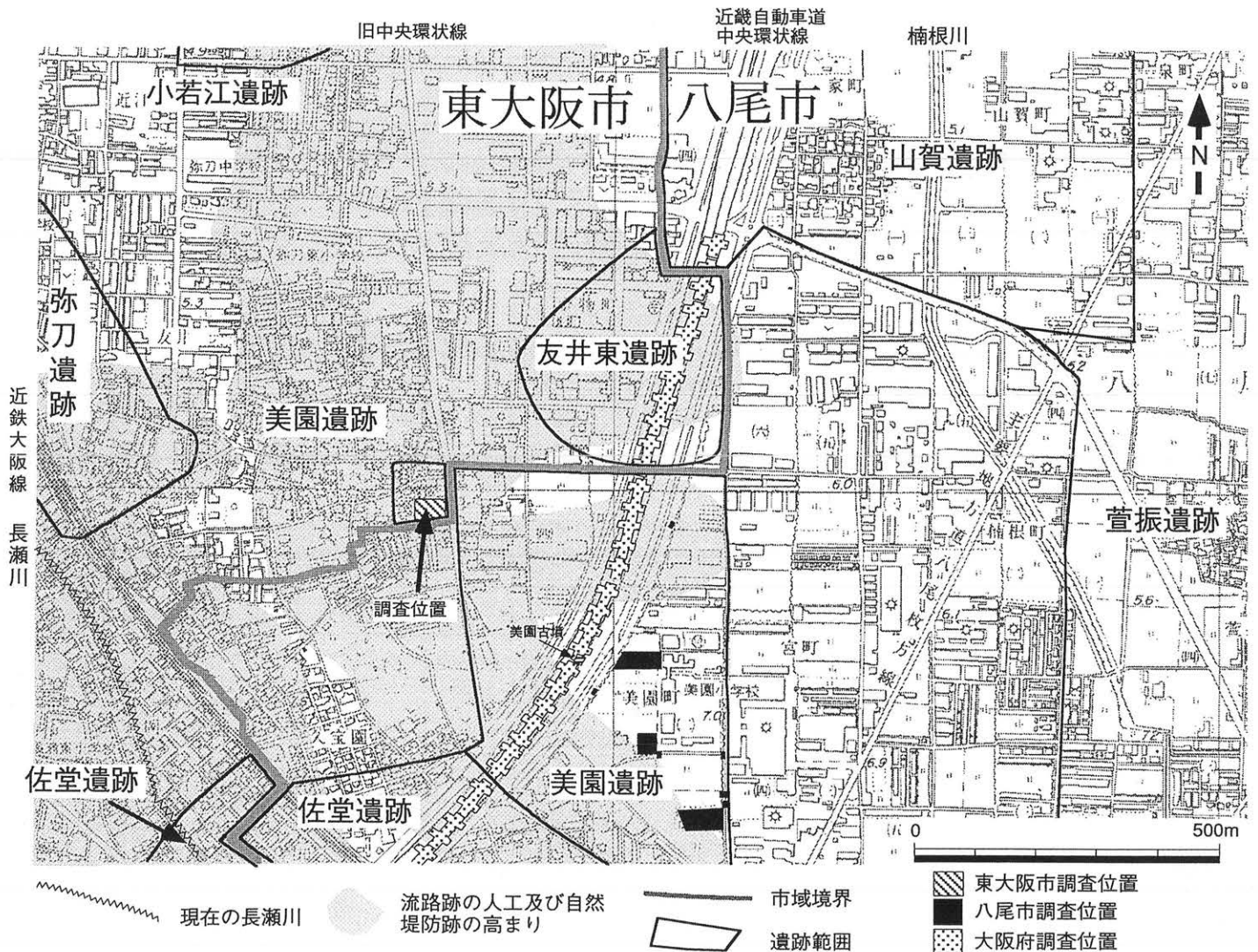
今回の調査地は、東大阪市の西南部、旧主要地方道大阪中央環状線(以下旧中環)に東面し、東と南を八尾市と接する所、近鉄大阪線弥刀駅からは東へ直線約600m、大阪府道中央環状線から西へ直線約300m、西方約650mには現在

の長瀬川が北流する。地籍では、東大阪市友井4丁目832番地にあたる。調査地点は、河内平野の南部中央部分にあり、周辺の標高は6m。低地の中では高いところにある。

昭和36年撮影の航空写真で、今回の調査地をみると、近鉄大阪線久宝寺口駅西側付近で分流した、長瀬川分流路の流路跡および人工・自然堤防跡の高まりのほぼ中央、北西・北東・北の方向へ土砂を吐き出す分岐点に立地していることが判読できる。この高まりは北方へのび、現在の府営上小阪住宅の北側あたりまで続く。また調査地の立地するあたりは、東面する旧中央環状線に沿った部分が尾根状に最も高く、西に向かって低くなる場所であることがわかる。今回の調査では、この東高西低の地形の起源が8世紀以前に遡ることを確認した。

図2には、美園遺跡周辺の遺跡分布図に、現在の長瀬川の位置とその流路周辺に広がる高まり（図の南西隅のトーン部分）と、当調査地が立地する長瀬川分流路の高まり（図の中央西よりのトーン部分）の範囲を図示した。この図を見ると、当遺跡北東にある、弥生時代～古墳時代に集落跡の発達した友井東遺跡や、南西にある、同時期の佐堂遺跡の八尾市域側は、いずれも当遺跡が立地する高まりの上に展開した遺跡であることがわかる。したがってこれらの遺跡は一連のものとして、相互の関連を視野に入れて考える必要がある。しかし一

図2 美園遺跡位置図



方で西に隣接する弥刀遺跡は、当遺跡と距離的には近接しているものの、立地する高まりが違うことから、関連を考える上で注意が必要であろう。

府の報告では、美園遺跡が立地する高まりの起源を、縄文時代晩期以前に遡るとしている。この報文通りならば、旧大和川の2本の本流の一つである旧長瀬川は、縄文時代晩期以降、幾筋も分流路を作り、土砂を撒きながら北上していったと考えられる。

以下にこれまでの調査の成果(亀島ほか1984,生田ほか1983,渡辺ほか1985,三宅ほか1984,阪田ほか1984,村上ほか1987,成海1993,岡田1993,高萩1996,西村1996,米田1983,渡辺1988)を時代ごとに概観する。

- ・縄文時代後期～晩期には旧長瀬川が増水し、分流路を作りながら周囲に砂礫を厚く堆積させた。府の調査では、この河川堆積物から滋賀里式の深鉢が、また美園遺跡の西に位置し、協会が行った弥刀遺跡の調査でも、ほぼ同時期と考えられる河川堆積物から凸帯文土器が出土している。

- ・弥生時代前期後半から中期初頭は、前代までに河川堆積物によって形成された微高地上に、集落が発達する。この集落は墓域を中心に、その周りを居住域が取り巻き、南北約180mの広がりを持つと考えられている。さらにその南北の外側には、生産域の存在が明らかにされ、墓域・居住域・生産域といった、当時の集落を構成すると考えられる要素が、一括して見つかった。

- ・弥生時代中期は初頭以降に、河川の氾濫によって前代の集落が廃絶し、同時に厚い砂層の堆積で、更なる高まりが発達した。

- ・弥生時代中期も後半になると、縁辺部ではあるが集落が作られ、検出された遺構から、墓域・生産域(水田)の可能性が示唆される。

- ・弥生時代後期前半には、再び河川の氾濫が起り、美園遺跡より南側と北側(友井東遺跡・佐堂遺跡)で集落は発達する。

- ・弥生時代後期末から古墳時代初頭(庄内期前半)に、三度集落が作られる。やはり、集落の中心ではなく、集落の縁辺部を構成する。遺構からは、墓域の可能性が示唆される。

- ・庄内期後半には、集落が北進し、前代では認められなかった掘立柱建物など居住域を示す遺構が見られた。この頃、弥刀遺跡でも、井戸や柱跡など集落を構成する遺構が認められ、東だけでなく、西側にも集落の発達が見られる。この時期に当地域が、地形的に安定していたと考えられる。

- ・古墳時代前期(布留期)は前代とほぼ同じ場所に集落を営む。東西の幅は約50mで、南北にも広がりを見せる。生産域・墓域も同時に確認でき、生産域では水田と畠の存在が示唆される。墓域では、土器棺墓と方形周溝墓が認められる。北接する友井東遺跡でも、同時期の方形周溝墓が認められており、本遺跡の北側に、友井東遺跡で認められる集落と共有する墓域の広がりが想定される。また、1辺7mと小規模ながら、精巧な形象埴輪や壺形埴輪を出土した美園1号墳が築かれるのもこの頃である(4世紀末)。この古墳の主体部などは、6世紀半ばの造成によって削平されており、被葬者など詳細については不明であるが、出土する遺物の質や量からもある程度の力を持った勢力の存在が示唆される。この時期以降、弥刀遺跡では砂層が厚く堆積し、中世まで遺構は認められない。

- ・古墳時代中期になると、遺構がかなり希薄になり、集落も見られない。一部を除いてほとんどが耕作地化される。美園古墳を削平するのもこの時期であり、この土地利用の変化は、在地勢力の交代を意味するとも考えられる。府の

報告者も、この時期の土地利用の変化について、「・・・(中略) いずれにしても自然環境の変化に伴う移動とは考えられず、何らかの政治的な影響によるものではないだろうか。」(渡辺 1985) としている。

- ・飛鳥時代～奈良時代、特に7世紀末には、遺跡範囲の北側で現在の坪境大畦畔と重なる畦畔が認められる。南側は、大きな流路が発達する。

- ・奈良時代末～平安時代は、府道中央環状線より東の部分では、前代からの耕作地が続く。今回の調査では、杭と板を用いた構造を有する溝や、墨書土器が出土した溝などを検出した。

- ・平安時代後半～鎌倉時代は、耕作地も引きつがれるが、一部で掘立柱建物も認められ、集落が新たに作られる。特に遺跡南部から南接する佐堂遺跡北部にかけて、集落の広がりが認められる。

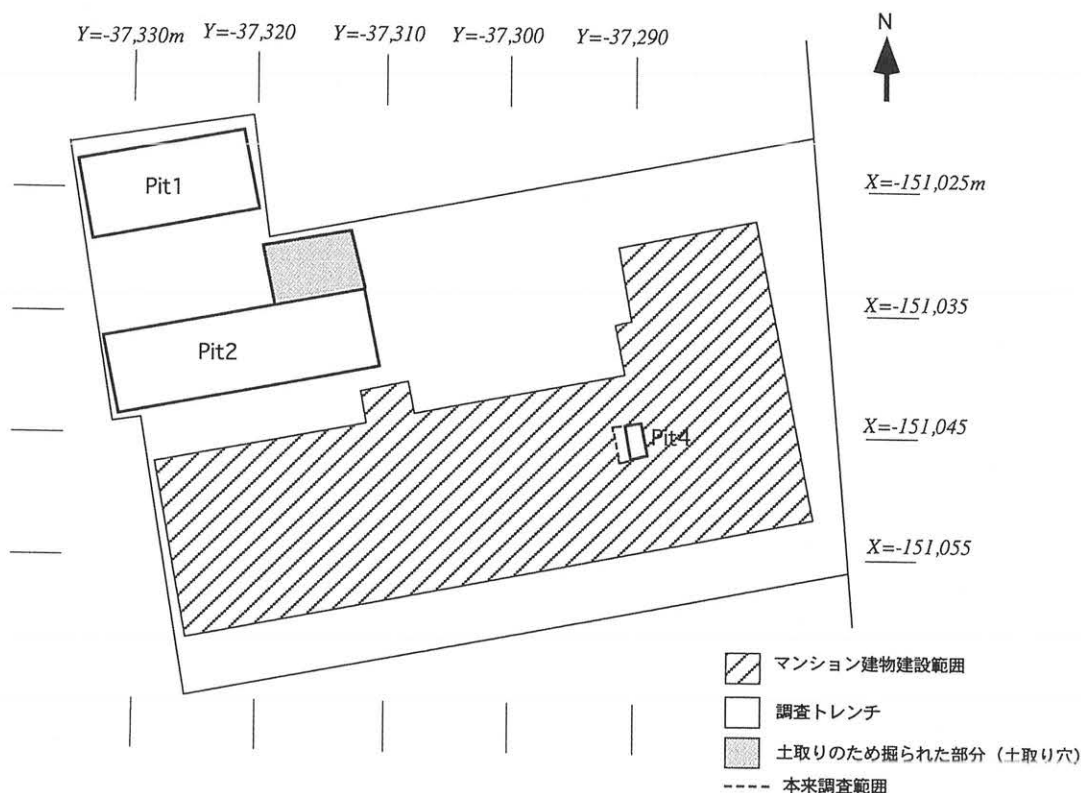
佐堂遺跡の調査によって、長瀬川の流路が11世紀には固定されることが明らかになり、この時期以降、条里の大畦畔にそって幅約9mの水路が、佐堂遺跡北部から美園遺跡にかけての部分で開削される。

- ・室町時代～江戸時代には、美園遺跡のほぼ全域が耕作地となる。坪境の大畦畔も現在とほぼ重なった状態で検出され、同時に島畠の遺構も認められる。大和川付け替え(1704年)までの間は、洪水に何度も耕作地を流されながら、連綿と耕作を続けていたようである。今回の調査でも、この時期の河川堆積物(洪水堆積層)を検出した。

以上のように、美園遺跡は、友井東遺跡・佐堂遺跡とともに旧長瀬川の分流路が形成する高まりの上に発達してきた遺跡であり、その立地条件が故に、度重なる洪水のために再三廃絶や、再興を繰り返してきたことがわかる。

その中でも、弥生時代前期と古墳時代初頭に、集落の中心地として発達し、律令期には、条里に載った耕作地となる。また長瀬川の流路の固定と共に、集落の発達が見られるが、室町時代以降は再び耕作地となる。などが特徴として挙げられる。

図3 調査トレンチ位置図



3 調査の概要

ここでは、発掘調査の結果を、各調査トレンチごとに述べる。トレンチ名は調査当時使用していた名称を使用し、北西より Pit.1、東端を Pit.4 とする。したがって以下遺構名との混同を避けるため、トレンチは「Pit.」（英語）、遺構の柱穴は「ピット」（カタカナ）で表記する。

なお、記載する Pit.4・Pit.1・Pit.2 の順は、調査着手順である。また Pit.3 は、市の建設基準の緩和に伴い、調査開始当日に調査が取りやめになったために欠番となった。

3.1 Pit.4

このトレンチは、マンション建設予定地内（以下予定地）の東側に位置する貯水槽部分である。本来の規模は4×3mの長方形を呈するトレンチであった。しかし、本調査直前に市教委立ち会いのもと行われた、西に隣接するマンション本体基礎部分建設に伴う掘削工事において、すでにトレンチの西半分は掘削されており、実際に行った調査範囲は4×1.5mであった。（当然その部分の調査データはない）

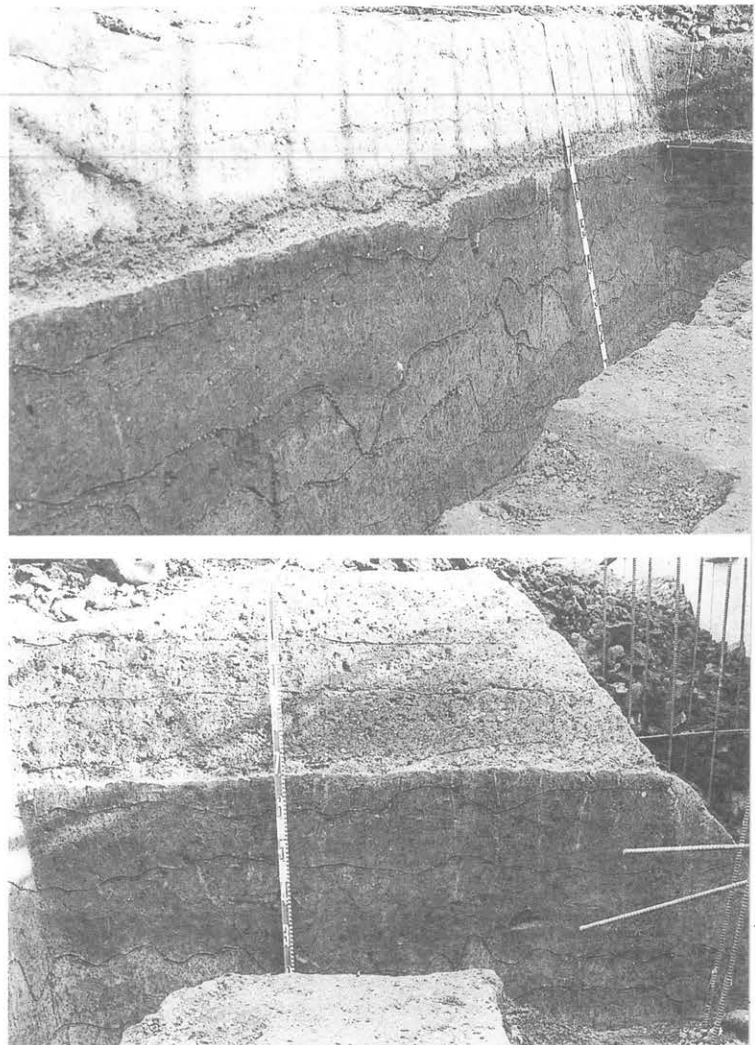
3.1.1 Pit.4 の層序

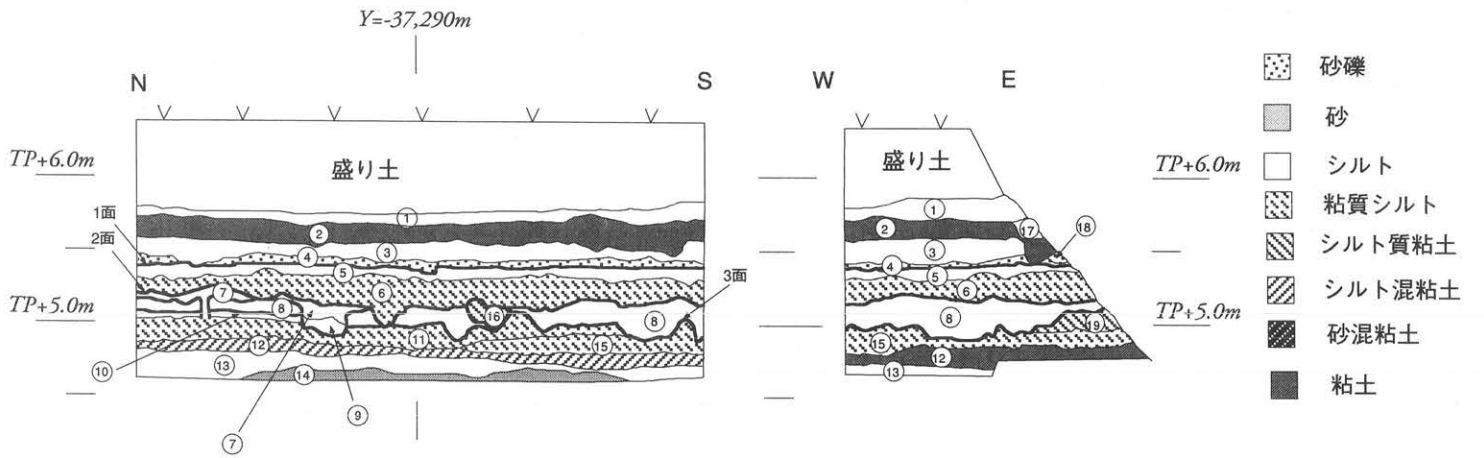
今回の調査では3つの遺構面と、遺物包含層を確認することができた。

このトレンチの層序は以下のとおりである。

- 1層 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫混シルト
- 2層 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色砂礫混粘土（鉄分多く入る）
- 3層 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫混シルト（鉄分入る）
- 4層 2.5Y7/4 浅黄色荒砂～粗砂
- 5層 2.5Y5/1 黄灰色シルト（粗砂混、鉄分多く耕土か）
- 6層 10YR3/2 黒褐色粘質シルト（鉄分・炭化物多く入る）
- 7層 10YR2/2 黒褐色シルト（2.5Y4/3オリーブ褐色シルトブロック入る）
- 8層 2.5Y4/1 黄灰色シルト（粗砂混）
- 9層 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂（炭化物入る）{断面図10層}
- 10層 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（鉄分・マンガン多く入る）{断面図11層}
- 11層 7.5YR4/3 褐色シルト混粘土（マンガン多い）{断面図12層}
- 12層 5Y5/1 灰色極細砂混シルト（やや粘質）{断面図13層}
- 13層 10BG5/1 青灰色シルト質細砂（植物遺体少し入る）{断面図14層}

図4 Pit.4 東壁断面(上) 南壁断面(下)





1. 2.5Y4/3オリーブ灰色砂礫混シルト
2. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂礫混粘土 (鉄分多く入る)
3. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫混シルト (鉄分入る)
4. 2.5Y7/4浅黄色荒砂～粗砂
5. 2.5Y5/1黄灰色シルト (粗砂混・鉄分入る) 耕土?
6. 10YR3/2黒褐色粘質シルト (鉄分、炭化物多く入る)
7. 10YR2/2黒褐色シルト (2.5Y4/3オリーブ褐色シルトブロック入る)
8. 2.5Y4/1黄灰色シルト (粗砂混・2.5Y4/3オリーブ褐色シルトブロック多く入る)
9. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト (鉄分入る)
10. 2.5Y4/2暗灰黄色極細砂 (炭化物入る)
11. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト (鉄分、マンガン多く入る)
12. 7.5YR4/4褐色シルト混粘土 (マンガン多い)
13. 5Y5/1灰色極細砂混シルト (やや粘質)
14. 10BG5/1青灰色シルト質細砂 (植物遺体若干入る)
15. 10YR4/4褐色粗砂粘質混シルト (鉄分、マンガン入る)
16. 10YR4/1褐灰色シルト質粘土 (炭化物、マンガン混)
17. 10YR5/4にぶい黄灰色荒砂混シルト (マンガン混)
18. 10YR6/1褐灰色荒砂～中粒砂
19. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト質粘土 (雲母若干入る・鉄分入る)

図5 Pit.4 東壁・南壁断面図

3.1.2 遺構と遺物

第1面 (5層上面)

現地表面より約1.0m下で、2条の溝を検出した。溝は、共に東西方向にトレンチを横断し、その東西端部はトレンチの外方に広がる。上面は削平を受ける。

溝1は、トレンチ北側に位置し、座標東に対して約10°北に振る方位をとる。断面緩やかな逆山形で、幅0.3m、全長1.5m以上、深さ0.06mの規模を呈する。遺物は、土師器細片が出土したが図化可能な物はない。

溝2は、トレンチ中央に位置し、座標東に対して約17°北に振る方位をとる。

断面逆台形で、幅0.3m、全長1.5m以上、深さ約0.08mの規模を呈する。溝底には、スキ刃の痕跡が認められる。遺物は、土師器・須恵器の細片が出土したが図化可能な遺物はない。

同一面で検出したが、断面観察から溝2は溝1より下位にあることがわかった。しかし共に出土遺物は細片であり、遺物から両者の時期差の詳細は明らかにできない。

これらの溝は、耕作に伴うものと考えられる。出土した遺物や遺構上位にある堆積層の年代観から、中世以降に埋没したものと考えられる。また、トレンチ南半部で、数本の杭跡を検出した。直上の砂層上面には杭の痕跡が認められなかったことから、この面が埋没以前に打設されたものと思われる。

第2面 (6層下面)

現地表面より1.25m下の部分で、3条の溝を検出した。溝は、全て東西方向であり、東西両端はトレンチ外に広がる。

溝3は、中央南寄りに位置し、座標東に対して4°北へ振る方位をとる。

幅0.4m、全長1.5m以上、深さ0.11mの規模を呈する。遺物は、須恵



図6 Pit.4 第1面、奥から溝1・溝2

手前に杭が見える。南から撮影

器・黒色土器・土師器甕・製塩土器などが出土したが図化可能な物はない。

溝4は、北側に位置し、座標東に対して5°北へ振る方位をとる。

幅0.3m、全長1.5m以上、深さ0.03mの規模を呈する。遺物は、土師器・製塩土器などが出土したが図化可能な物はない。

溝5は、北端部に位置し、座標東に対して4°北へ振る方位をとる。

北肩部分がトレンチ外に広がる。幅0.2m以上、全長1.5m以上、深さ0.02mの規模を呈する。遺物は、土師器・須恵器が出土したが、図化可能な遺物はない。

これらの遺構は、出土遺物から10世紀以降に埋没したものと考えられる。

第3面 (8層上面)

現地表面より約1.5m下で、4条の溝と4個のピットを検出した。溝はすべて東西方向で、トレンチ外に広がる。

溝6は、南端部に位置し、座標東に対し20°南へ振る方位をとる。

南肩部がトレンチ外に広がる。断面は逆台形で幅0.5m、長さ1.0m以上、深さ0.1mの規模を呈する。遺物は、須恵器甕・製塩土器などが出土したが図化可能な遺物はない。

溝7は、溝6の北側に位置し、座標東に対し9°南に振る方位をとる。

幅0.75m、長さ1.5m以上、深さ0.05mの規模を呈する。南肩部と北肩部分で断面の形状が異なり、南肩部は逆台形を、北肩部は逆三角形を呈し、中央部分は平坦である。遺物は、底部にヘラ記号を持つ須恵器の坏(図11-1、図12)のほか、土師器の坏や甕・製塩土器が出土した。

溝8は、中央北寄りに位置し、南半(8-1)と北半(8-2)2つに分ける事ができる。座標東に対して溝8-1は8°、溝8-2は2°南に振る方位をとる。

検出面は同一であるが、断面観察などから8-2が8-1の下位にあることがわかる。8-1は幅0.25m、長さ1.5m以上、深さ0.05mの規模を呈する。8-2は幅0.35m、長さ1.5m以上、深さ0.2mの規模を呈する。遺物は、掘削時に一括で取り上げた。須恵器坏・土師器坏、甕、羽釜・黒色土器・製塩土器(図11-2)などが出土した。

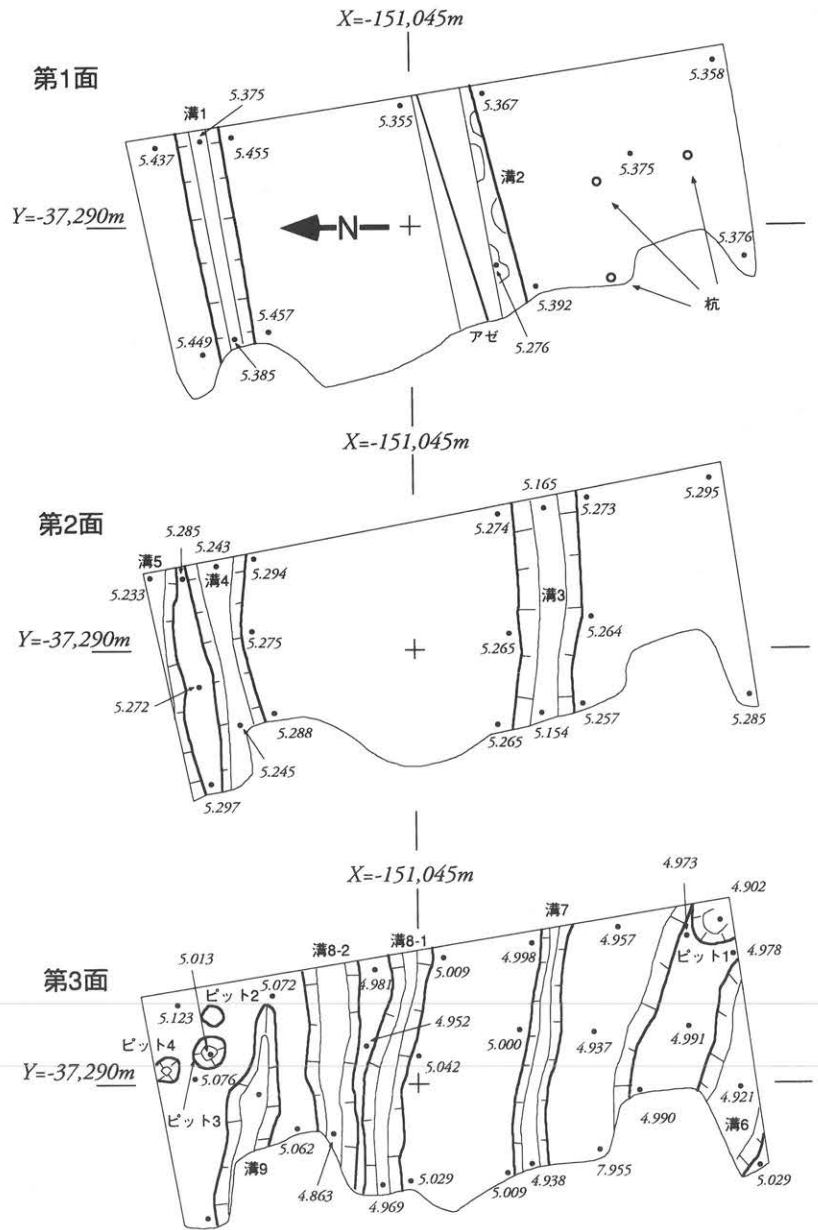


図7 Pit.4 遺構平面図



図8 Pit.4 第2面、スケールの手前が溝3南から撮影

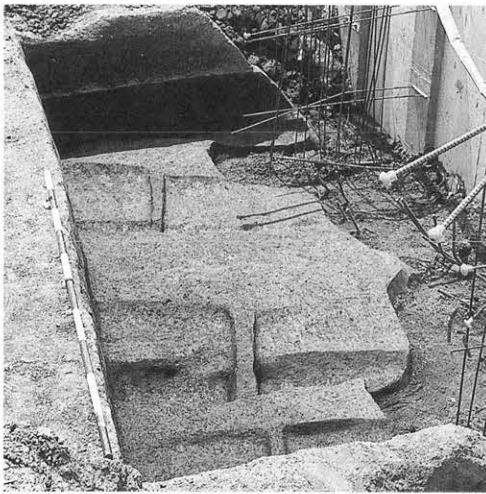


図9 Pit.4 第3面、北から撮影



図10 Pit.4 第3面北側、柱穴および溝9・溝8-2 北東から撮影

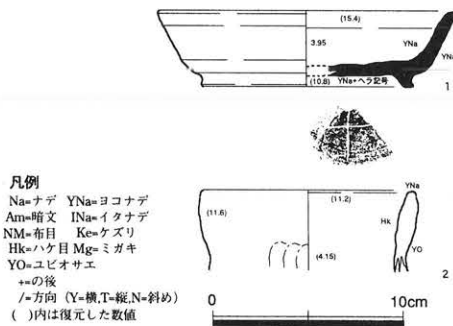


図11 溝7・溝8出土遺物実測図

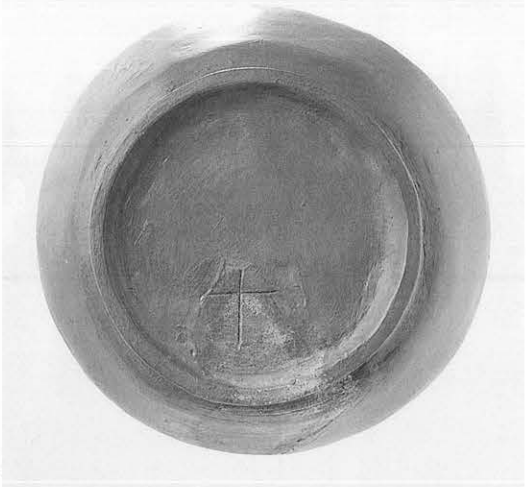


図12 溝7出土ヘラ記号を持つ須恵器

溝9は、北端部に位置し、座標東に対して7°南に振る方位をとる。幅0.35m、長さ1.5m以上、深さ0.07mの規模を呈する。東端部は東壁手前で消滅している。遺物は、土師器坏、製塩土器が出土したが図化可能な遺物はない。

ピット1は南東隅で検出した。約1/2がトレンチ外のため本来の規模は不明であるが、一辺約0.2mの隅丸方形を呈すると考えられる。深さは0.07m。遺物は土師器細片が出土したが、図化可能な遺物はない。

ピット2は北東部、溝9の北側で検出した。直径約0.15m、深さ0.07mの規模を呈する。遺物は土師器皿が出土した。

ピット3は北東部、ピット2の西側で検出した。直径約0.25m、深さ0.06mの規模を呈する。遺物は製塩土器が出土したが、図化可能な遺物はない。

ピット4は北東部、ピット3の北側で検出した。直径約0.15m、深さ0.05mの規模を呈する。遺物はない。

第3面は基本的に、8層上面で検出した遺構であるが、実際には7層上面・11層上面の遺構も同時に検出した。出土遺物や断面の観察から、溝6・7が最も古く、ついで溝8-2、溝8-1・溝9の順で新しくなる。ピットは、ピット1が最も古いと考えられるが後の3つについては、ピット1より若干新しいとしかいえない。また検出数も少なく、間隔・規模共に不揃いで規則性に乏しいことから、一連のものとは考えがたい。

この面の遺構の時期については、出土遺物や遺構の上下位にある包含層の年代観から、8世紀後半から9世紀半ばの時期と考えられる。

第3面のベースである11・12層からも土師器の皿(図13-5)、甕、竈(図15-14)、坏・須恵器短頸壺(図13-4)・製塩土器などが出土しており、下層にも遺構の広がりが想定された。しかし、調査掘削深度を超えることから、下層の部分について、調査は行っていない。(実際建設に伴い設定された掘削深度は、調査最終深度より1m以上深い。)

このトレンチで見られた遺構は、各時期を通じて主に東西溝であったが、各検出面で方位に特徴が見られた。すなわち、検出面で最も古い3面は座標東より南に振る方位をとり、第2面ではほぼ略東西、第1面では座標東より北に振る方位をとるものである。時期によつ

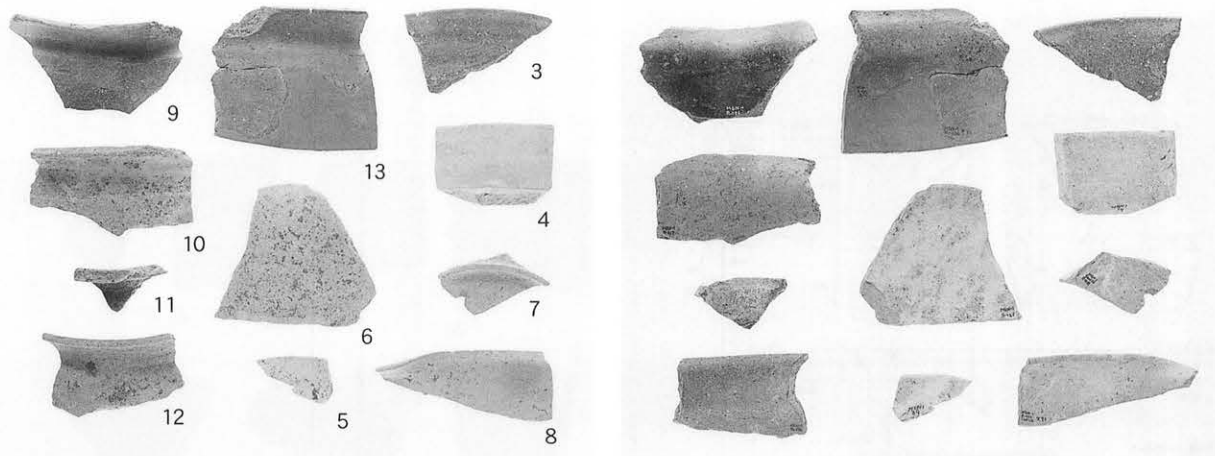


図 13 Pit.4 出土遺物

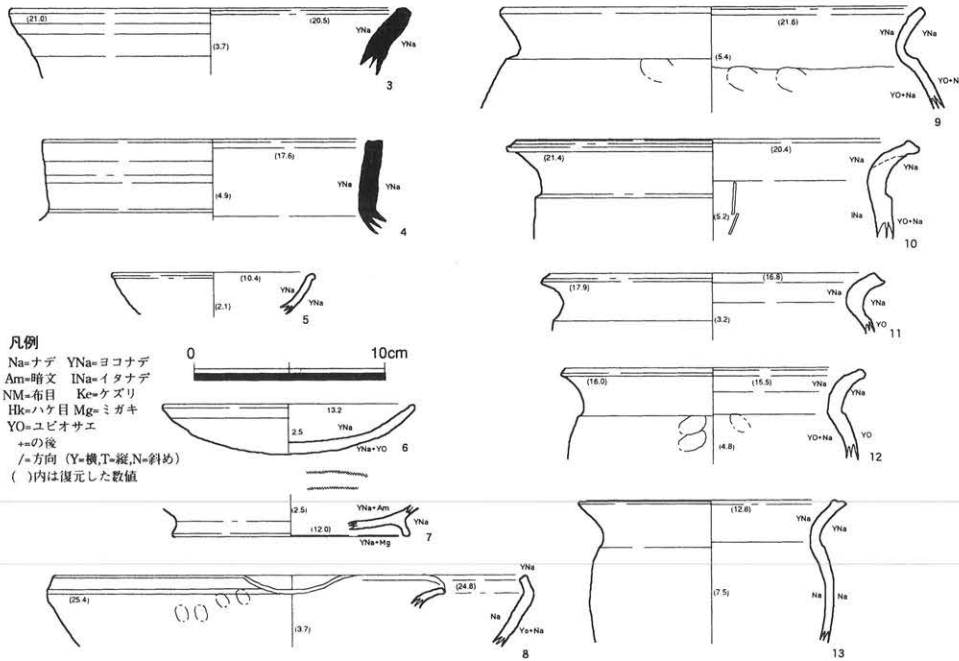


図 14 Pit.4 出土遺物実測図
 3は6層、4・5は11-12層、他は8層出土

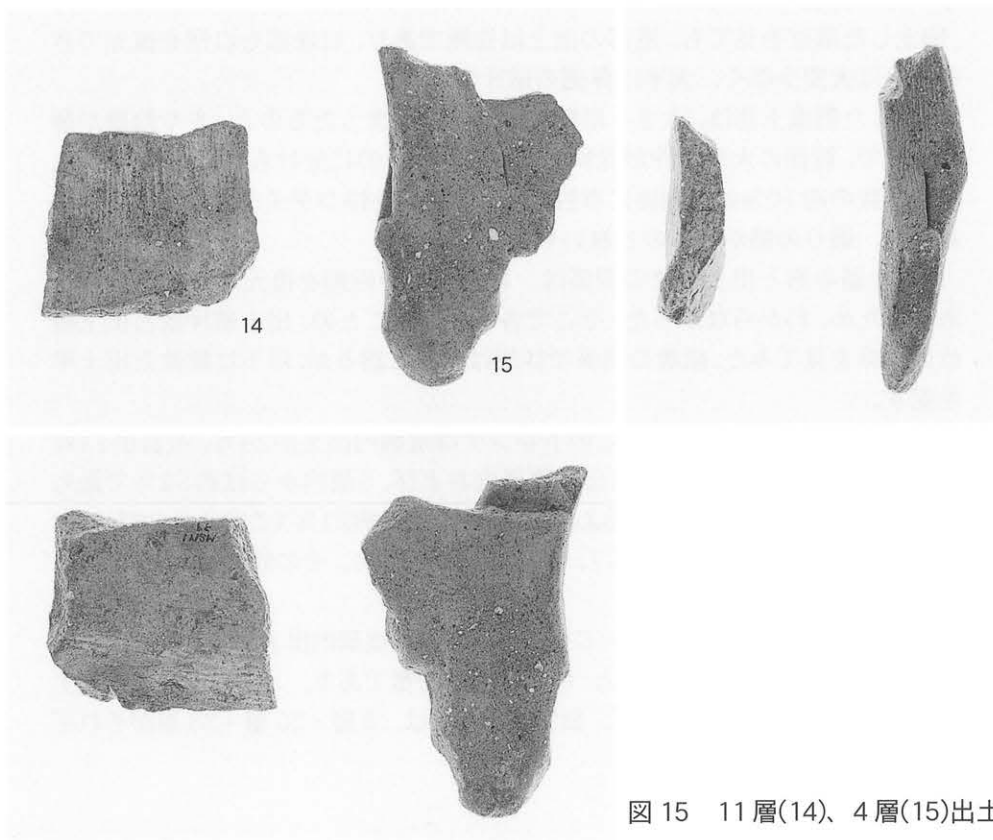
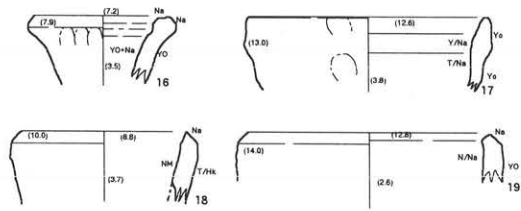


図 15 11層(14)、4層(15)出土竈



凡例

Na=ナデ YNa=ヨコナデ
 Am=暗文 INa=イタナデ
 NM=布目 Kc=ケズリ
 Hk=ハケ目 Mg=ミガキ
 YO=ユビオサエ
 ++の後
 /-方向 (Y=横,T=縦,N=斜め)
 ()内は復元した数値

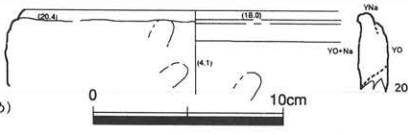


図 16 Pit. 4 第 3 面、出土製塩土器実測図

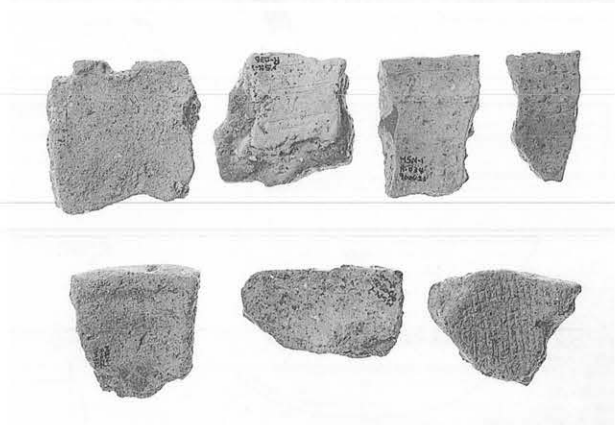
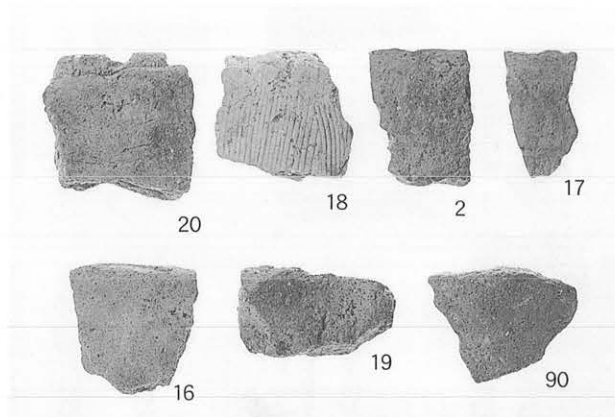


図 17 Pit.4 第 3 面、出土製塩土器

て区割りの方位が違うのであろう。

製塩土器

製塩土器は、8層を中心に出土した。他のトレンチからの出土を含めると334片である。しかし、完形もしくはほぼ完形に復元可能なものはない。(ここでは、特に記述のない限り、今回出土の製塩土器全体についての記載とする。)

出土した部位を見ても、底部の出土は皆無であり、口縁部も口径を復元できるものは大変少なく、大半は体部の破片である。

出土した製塩土器は、大きく器壁が厚く焼き締まったものと、やや器壁が薄く軟質で、粒径の大きな砂が混和材として含むものに分けられる。また、出土総破片数の約10%は、内面に布目(以下布目)を持つタイプであった。その布目も、織りの細かいものと粗いものがある。

製塩土器の形と出土層位の関係は、ほとんどが原形を復元できない破片であったため、わからなかった。そこで各トレンチごとの、出土破片数と出土層位の関係を見てみた。紙数の関係で詳細は別稿に譲るが、以下に総数と出土率を記す。

Pit.1での出土総数は92片。このトレンチは遺構内出土が24%、布目が11%である。個別の出土率は、第2面の遺構内および、5層内からは約52%で最も多い。ついで第3面の遺構内および、7層内からは約21%(このうち26%は内面に布目を持つものであった。)。4層からは約15%。その他は約11%であった。

Pit.2での出土総数は106片。このトレンチは、遺構内出土がほとんどないこと(約2%)、布目が少ないこと(約6%)が特徴である。しかし、全体の出土は多く、総数ではPit.1を凌ぐ。個別の出土率は、3層・20層・33層がそれぞれ

れ、約24・23.5・25%。28層は約6%。21層は約7%。その他約5%であった。

Pit.4での出土総数は139片。3つのトレンチで最も出土総数が多い。布目は約11%（内約79%が8層出土）、遺構内出土は約6%。個別の出土率は、8層および上面の遺構出土が約85%（布目含む）、6層は約9%。7層・11.12層ともに約3%であった。このことから、9世紀前半の遺物を含む堆積層や遺構を中心に出土率が高いことがわかる。またPit.4—Pit.2—Pit.1の順に、総数の減少が見えること、Pit.4に口径復元可能なものが多いことなどから、当該時期の集落が、今回の調査地南東部に存在した可能性が考えられる。

Pit.4の8層から出土したもののうち、比較的残りが良く、口径を復元可能な製塩土器を数点挙げた（図16）。これらは積山（1993）の分類を踏襲すれば、1.鉢形を呈し厚手の1類（19・20）、2.逆円錐形を呈する4類（16・17）、3.鉢形で内面に布目を持つ6b類（18）の3つに分けることができる。また氏の編年案で、いずれも8世紀後半に比定できることから、他の遺物の年代観と大きな齟齬はない。

3.2 Pit.1

このトレンチは、予定地の北西隅に位置する、立体駐車場予定地である。調査規模は13×6mの長方形を呈するトレンチである。中央北側には、土地造成時の産業廃棄物を投棄した穴が2ヶ所ある（東側約南北3.6×東西1.2m・西側約南北3.8×東西3.2m）。また、南西隅の部分には旧建物建設以前に埋没していたと考えられる、池状の落ち込みを確認した。

計画掘削深度までの間で、5つの遺構面と、遺物包含層を検出した。

3.2.1 Pit.1の層序

このトレンチの層序は以下のとおりである。

- 1層 5Y7/3 浅黄色極細砂（細砂入る・鉄分混じる）
- 2層 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂（粘土ブロック、粗砂混じる・鉄分入る）
- 3層 5Y5/1 灰色極細砂混粘土（鉄分多い・粗砂、中粒砂混じる）
- 4層 7.5Y6/1 灰色粘土（鉄分多い・粗砂混じる）
- 5層 5Y5/1 灰色荒砂混粘土（鉄分、マンガン分、土器多い）
- 6層 5Y5/3 灰オリーブ色粘質シルト（鉄分・炭化物入る）
- 7層 5Y5/2 灰オリーブ色シルト（鉄分多い・細砂混じる）
- 8層 5YB4/1 暗青灰色粘土（炭ラミナ状に入る）
- 9層 10GY4/1 暗緑灰色シルト質極細砂（雲母多い・シルト混じる）
- 10層 5G4/1 暗緑灰色細砂（雲母、シルト質粘土入る）{断面図13層}
- 11層 10GY6/1 緑灰色中粒砂～極細砂（雲母、植物遺体入る・ラミナ有り）
{断面図14層}

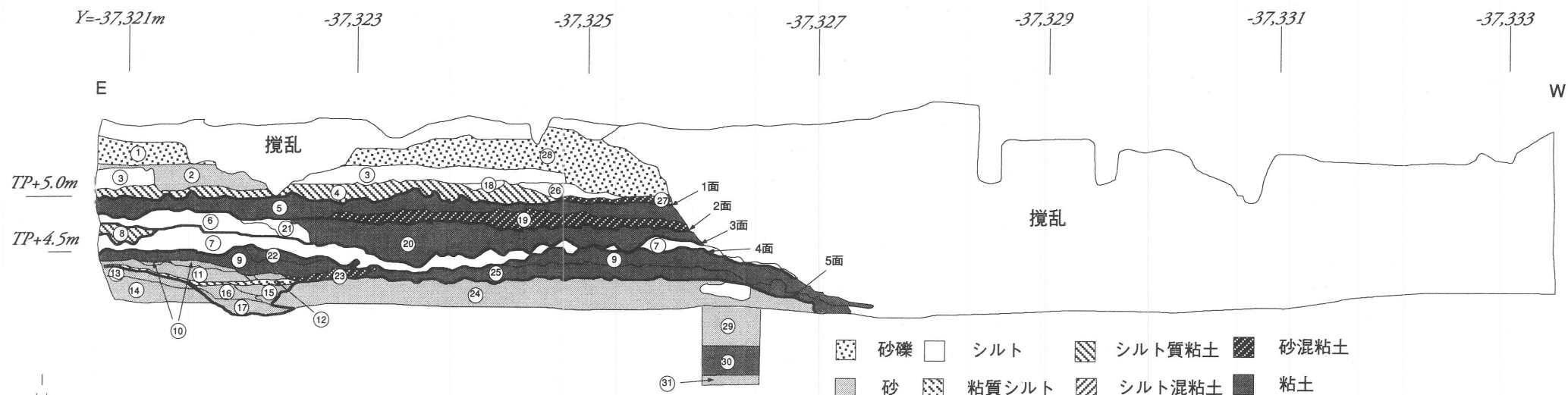
3.2.2 遺構と遺物

第1面（5層上面）

現地表面より約0.85m下（TP+4.85m）の部分で、溝2条・ピット・落ち込みなどの遺構を検出した。

溝は2条とも、トレンチ西部に位置する。最も西側の溝110は、南北方向の溝で、座標北にほぼの方位をとり、南端部はトレンチ中央付近で丸く終わる。上面が削平されているため、この部分が本来の端になるかは不明である。

図 18 Pit.1 南壁断面図



1. 7.5YR4/3褐色砂礫
2. 2.5Y5/4黄褐色粘土混極細砂 (鉄分混)
3. 2.5Y6/2灰黄色細砂混シルト (荒砂入る・鉄分混)
4. 2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土 (鉄分入る・部分的に極細砂入る)
5. 5Y5/1灰色粘土 (鉄分多い・炭化物若干入る・粗砂混)
6. 5Y6/2灰オリーブ色シルト (鉄分、マンガン多い・土器多く含む・荒砂含む)
7. 2.5Y5/4黄褐色砂混シルト (鉄分、マンガン多い)
8. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト質粘土 (鉄分、マンガン多い)
9. 10BG3/1暗青灰色粘土 (鉄分若干入る・炭ラミナ状に入る)
10. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土混中粒砂～粗砂 (雲母入る)
11. 7.5Y6/3オリーブ黄色中粒砂～細砂 (雲母多い・部分的に粘土ブロック入る・ラミナ有り)
12. 7.5GY4/1暗緑灰色粘質シルト
13. 10BG4/1暗青灰色極細砂 (雲母含む)
14. 10GY6/1緑灰色シルト～細砂 (雲母多い・ラミナ有り・上部シルト)

15. 10GY4/1暗緑灰色粗砂～細砂 (ラミナ有り)
16. 5G3/1暗緑灰色シルト～細砂 (雲母多い)
17. 10GY4/1暗緑灰色砂質粘土 (雲母、植物遺体入る)
18. 2.5Y6/3にぶい黄色粗砂混粘土 (鉄分入る)
19. 5Y5/1灰色砂混粘土 (荒砂混・土器入る・マンガン、鉄分入る)
20. 10YR3/3暗褐色粘土 (荒砂混・土器、炭入る) 溝121埋土
21. 5Y5/2灰オリーブ色シルト (粗砂混・鉄分入る)
22. 10Y4/1灰色粘土 (極細砂ブロック入る)
23. 7.5Y4/1灰色砂混粘土 (粗砂～細砂)
24. 5Y7/2灰白色粗砂～細砂 (ラミナ有り)
25. 7.5Y5/1灰色粘土 (東側粗砂混)
26. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト (荒砂混・鉄分入る)
27. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂混粘土 (荒砂・粗砂混)
28. 10YR7/6明黄褐色荒砂～中粒砂 (全体に酸化著しい・ラミナ有り)
29. 2.5Y7/2灰黄色粗砂～中粒砂 (ラミナ有り)
30. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 (植物遺体含む)
31. N4/1灰色粗砂混粘質シルト

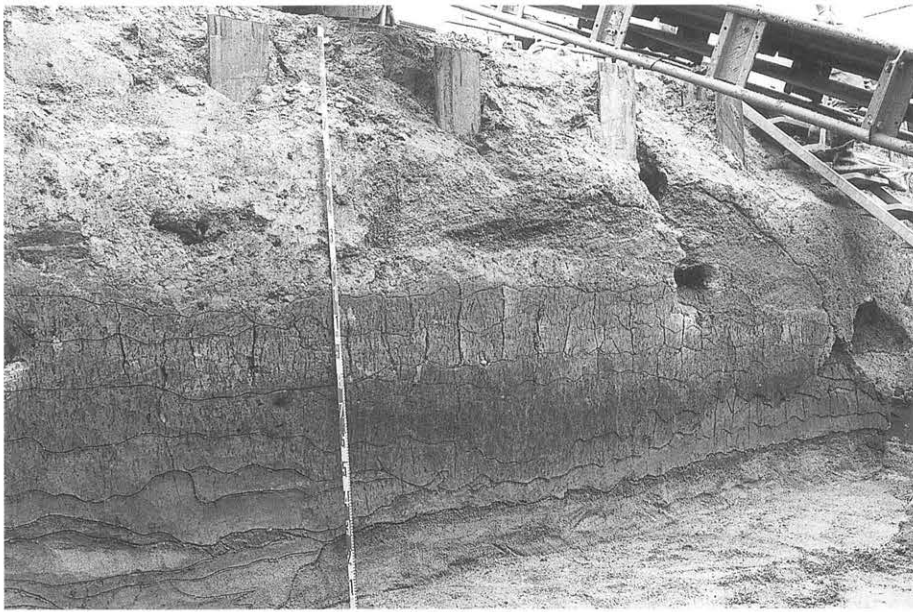


図19 Pit.1 南壁断面(左)

図20 Pit.1 第1面、全景
東から撮影(下)



北端部もトレンチ外に広がるため本来の規模は不明である。検出時の規模は、長さ2.4m、幅0.5m、深さ約0.3mである。遺物は、土師器細片が出土したが図化可能な物はない。

溝111は溝110の東側に位置する南北方向の溝で、座標北に対して、5°西へ振る方位をとる。北部はトレンチ外に、また南部は攪乱によって切られているため本来の規模は不明である。検出時の規模は幅0.4m、全長1.7m、深さ0.09mである。遺物は、土師器・須恵器細片が出土したが図化可能な遺物はない。

ピット105はトレンチ南東部に位置する。直径0.5mの不整円形を呈し、深さは約0.35mである。断面に柱痕跡が見られることから、柱穴であることがわかる。痕跡より柱の規模は直径約0.25m以下と推定できる。遺物は、土師器・製塩土器の細片が出土したが、図化可能なものはない。

落ち込み101はトレンチ東端に位置し、溝状に南北方向の広がりを持つ。座標北に対し2°東に振る方位をとる。東側および南北両側はトレンチ外に広がるため、本来の規模は不明である。検出規模は、長さ4.4m、幅0.8m、深さ約0.05mである。遺物は、土師器・須恵器甕の細片が出土したが、図化可能なものはない。

溝は、トレンチ東側には認められない。またピットは柱痕跡を残すものの、対になるピットは認められず、建物に伴うものかは不明である。

この面を覆う堆積層(4層)には、土師器碗や坏・甕・皿の他、須恵器の小壺、製塩土器など古い要素をもつ遺物(図23・24)と共に、瓦器や黒色土器の細片など中世の遺物が多く認められた。遺構内から出土する少量の遺物には瓦器や黒色土器は入らないことから、これら遺構は瓦器流通以前に埋没したと考えられる。

第2面(6・20層上面)

現地表面より1.0m下の部分で、2条の溝とピット、土壙を検出した。

溝112はトレンチ中央、攪乱北辺で検出した東西溝である。座標西に対して11°北に振る方位をとる。東西両端部分は攪乱によって削られており、本来の規模は不明である。検出規模は、長さ1.7m、幅0.3m、深さ0.07mを呈する。遺物の出土はない。

溝116は、トレンチ東端で検出した南北溝である。座標北に対して4°東に振る方位をとる。南北両端はトレンチ外に広がるため本来の規模は不明である。検出した規模は、長さ4.7m、幅0.6m、深さ0.07mを呈する。遺物は、須恵器甕・壺、土師器皿、製塩土器の細片が出土したが図化可能なものはない。



図21 柱穴105断ち割り断面
東から撮影

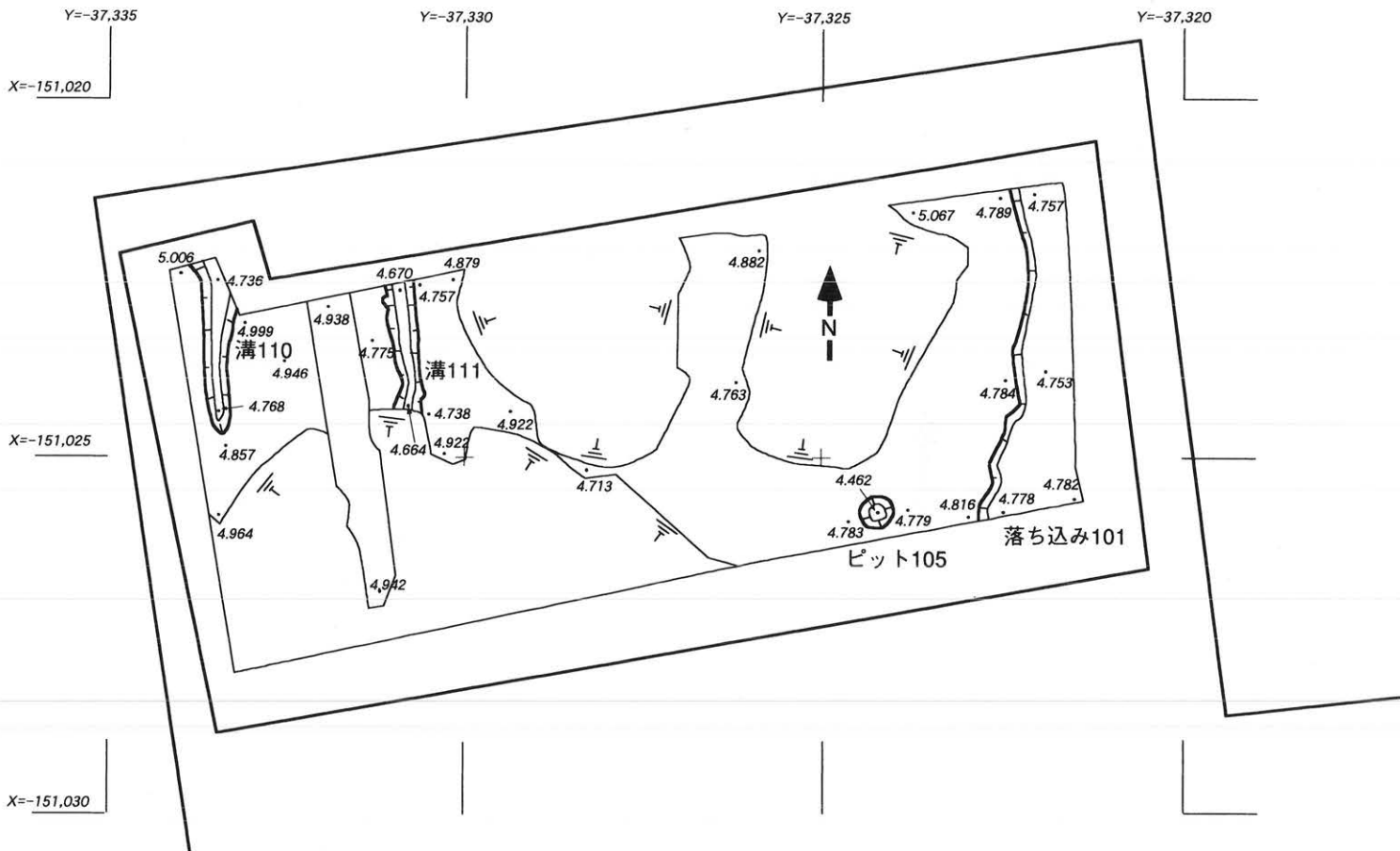


図 22 Pit.1 第 1 面、遺構平面図

土壌105は、トレンチ南東で検出した。遺構の東半分がトレンチ外に広がるため本来の規模は不明である。検出した規模からは、南北1.3m、東西0.85m、深さ0.02mの隅丸方形を呈すると考えられる。遺物は須恵器、土師器甕細片が出土したが、図化可能なものはない。

ピット106は、トレンチ北東で検出した。南北0.45m、東西0.3m、深さ0.04mの不整円形を呈する。遺物は、製塩土器の細片が出土したが、図化可能なものはない。

図 23 Pit.1 4 層出土遺物

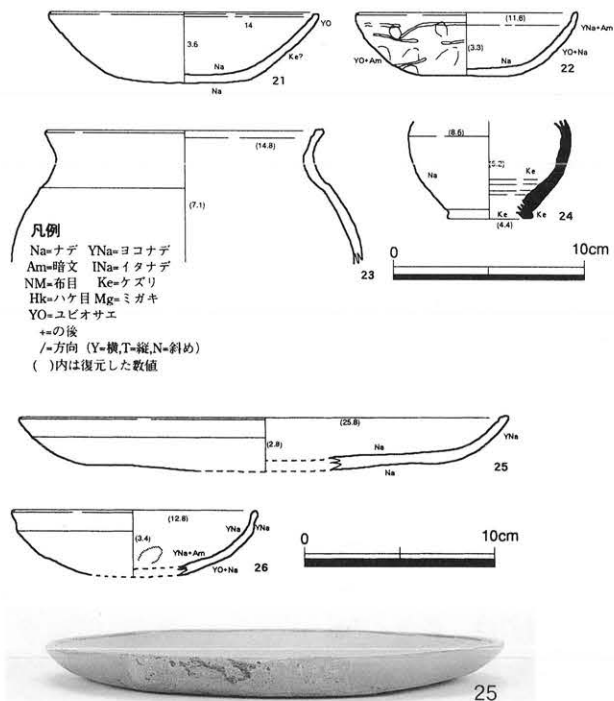
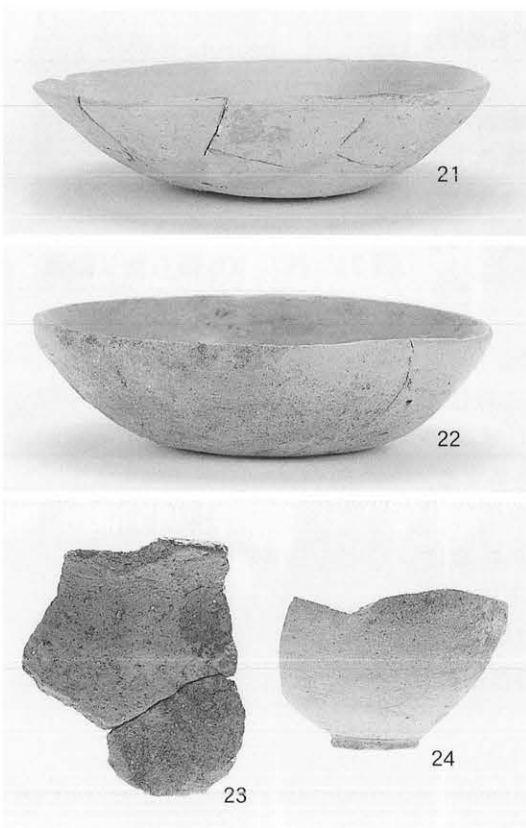


図 24 Pit.1 4 層出土遺物実測図 (上)
 図 25 Pit.1 5 層出土遺物実測図 (中)
 図 26 Pit.1 5 層出土遺物 (下)

ピット107は、土壙105の南西隅に隣接して検出した。東半分はトレンチ外に広がるため、本来の規模は不明である。直径0.45mの円形を呈すると考えられる。深さは0.1m。遺物の出土はない。

この面の埋没下限年代は、出土遺物の年代観や、上位の遺構面の年代観から、10世紀前半ごろと考えられる。

第3面（7層上面）

現地表面より約1.1m下の部分で、2本の溝と土壙を検出した。

溝115は、トレンチ西半で検出した南北溝である。座標北に対し、15°西に振る方位をとる。南を攪乱で削られ、北はトレンチ外に広がるため本来の規模は不明であるが、南のPit.2トレンチで、連続すると考えられる溝を検出しており、同一のものとするれば、全長は21mを越えると考えられる。検出規模は幅0.75m、深さ0.6mを呈する。遺物の出土はない。遺構に溜まった堆積層の観察から、滞水と水流が交互にある、水路としての機能が考えられる。

溝117は、トレンチ西半南にある攪乱の北辺で検出した東西溝である。座標西に対して23°北に振る方位をとる。南岸部は攪乱に削られる。また東端はトレンチ外に広がり、西端は溝115とぶつかるため、本来の規模は不明である。検出規模は、長さ5m、幅0.3mを呈する。遺物は土師器細片が出土したが、図化可能なものはない。

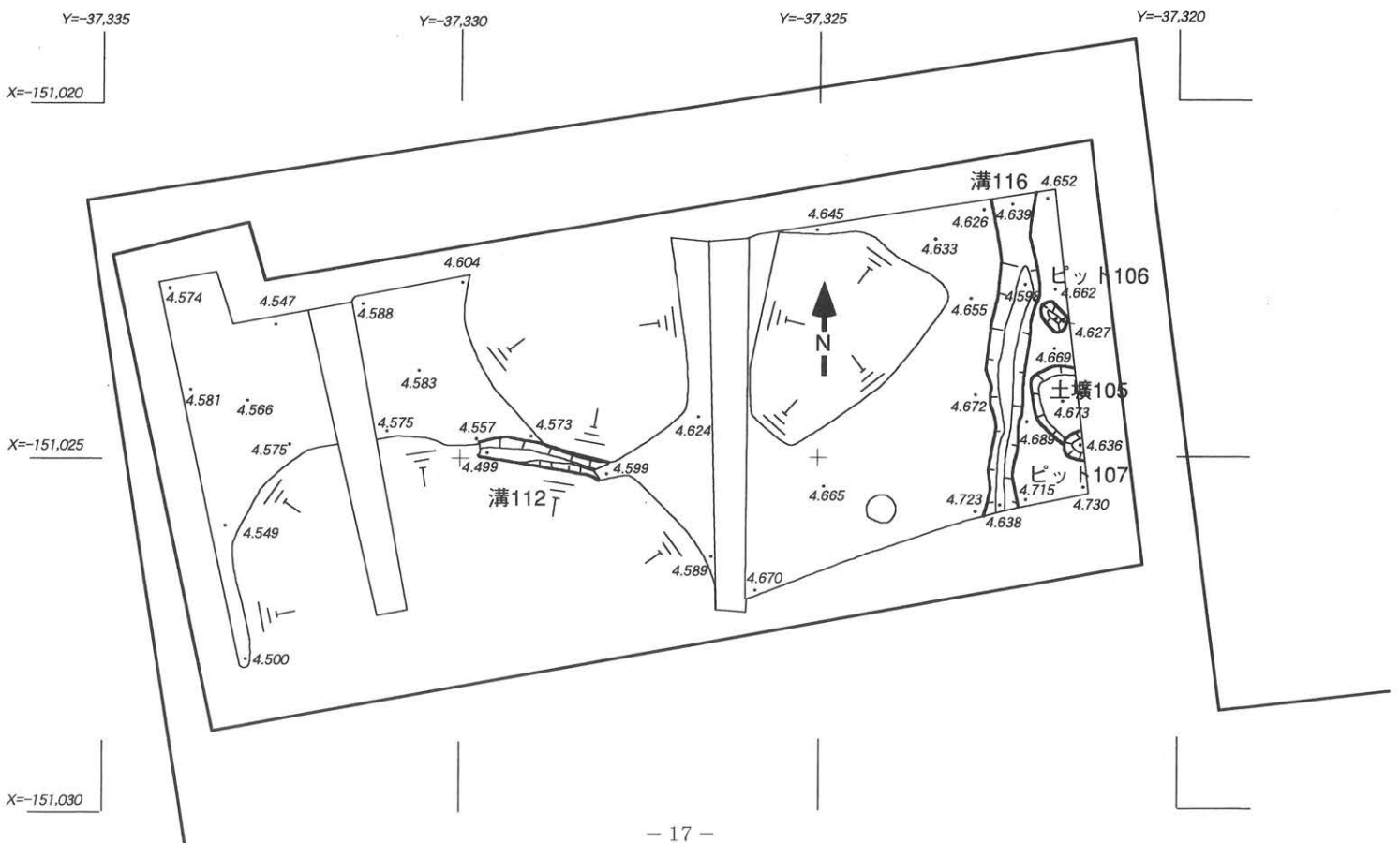
溝115との接点部分は、攪乱の北辺と混同しており不明瞭であった。しかし、溝115以西に連続する部分が認められないことから、溝の西端部が溝115までであったと考えられる。

土壙106はトレンチ東端南よりで検出した。南北1.6m、東西0.4mの不整形の楕円形を呈し、深さは0.07m。遺物は須恵器甕、土師器、製塩土器を検出したが、図化可能なものはない。



図27 Pit.1 東側第2面、遺構検出状況 南から撮影

図28 Pit.1 第2面、遺構平面図



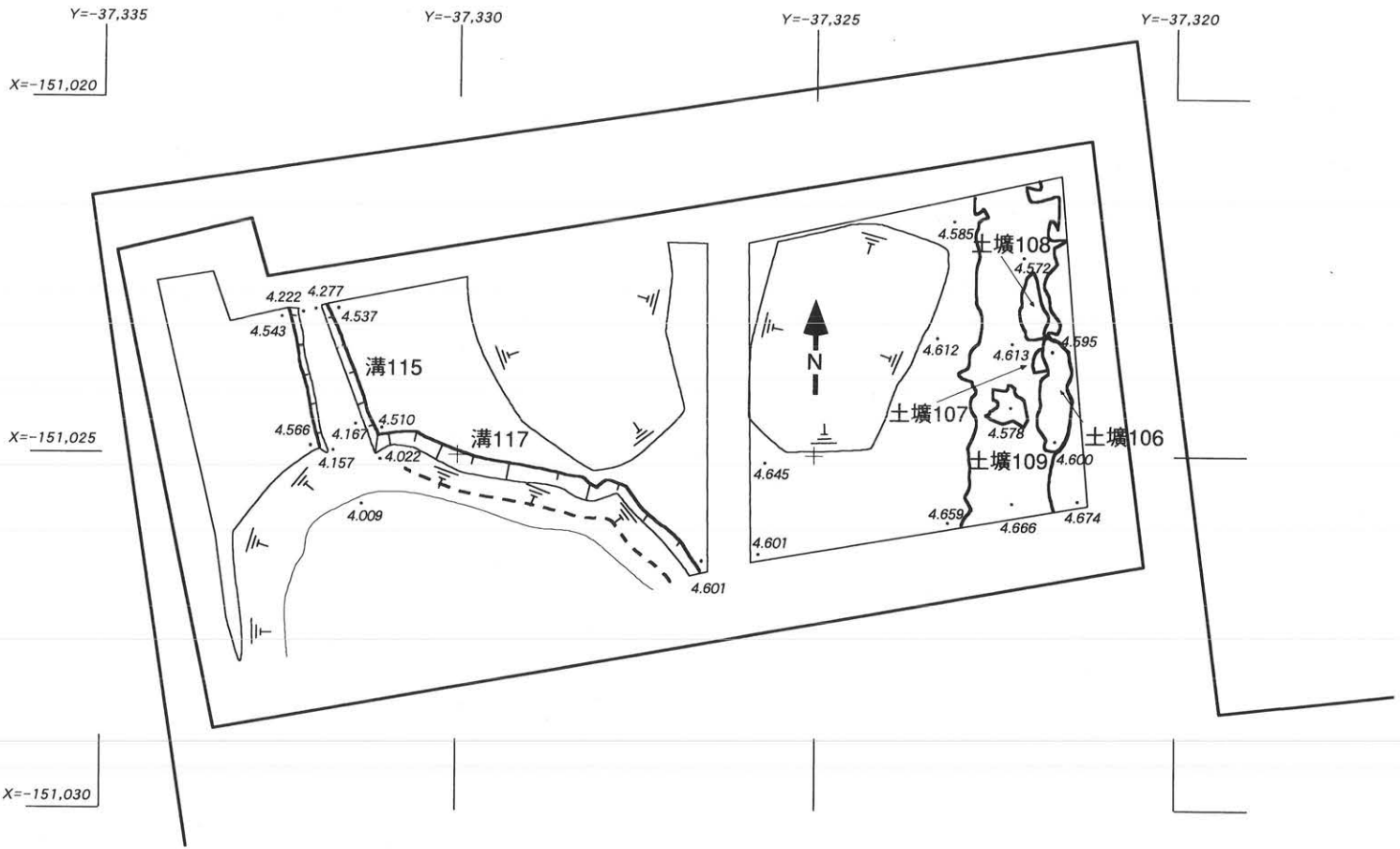


図 29 Pit.1 第 3 面、遺構平面図

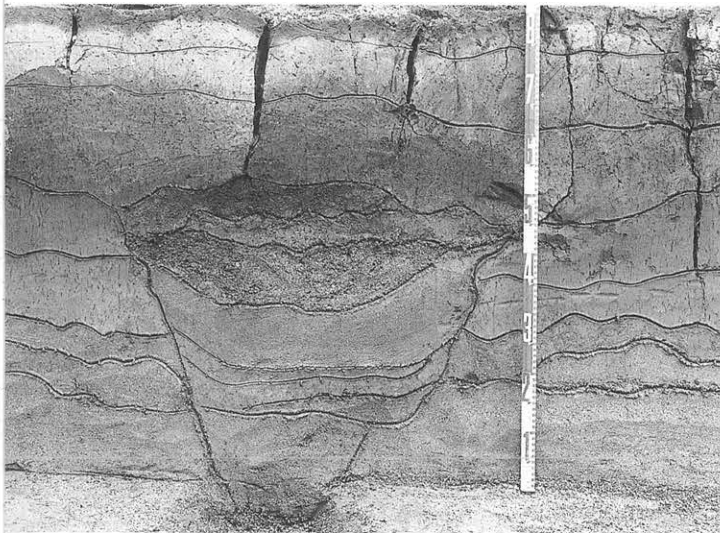


図 30 溝 115 北壁断面
図 31 溝 115 北壁断面図

土壌 107 は、土壌 106 の北西辺に隣接して検出した。東半部を土壌 106 に削られる。直径約 0.3m の不整形円形を呈する。深さ 0.07m。遺物の出土はない。

土壌 108 は、土壌 106 の北に隣接して検出した。南北 0.9m、東西 0.4m の不整形を呈し、深さは 0.03m。遺物は土師器甕、製塩土器を検出したが図化可能なものはない。

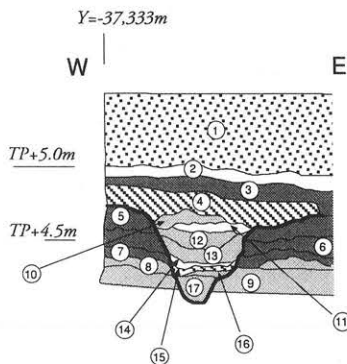
土壌 109 は、土壌 106 の西側で検出した。東西南北ともに 0.5m の不整形を呈する。深さは 0.05m。遺物は土師器細片を出土したが図化可能なものはない。

この面の埋没下限年代は、出土遺物や上位の堆積層の年代観から、9 世紀はじめから 9 世紀半ばと考えられる。

第 4 面 (9 層上面)

現地表面より約 1.2m 下の部分で、2 条の溝と人間の足の踏み込みを検出した。

溝 118 は、トレンチ西半中央部分で検出した南北溝で



- ① 砂礫
- ② 砂
- ③ シルト
- ④ 粘質シルト
- ⑤ シルト質粘土
- ⑥ シルト混粘土
- ⑦ 砂混粘土
- ⑧ 粘土

1. 7.5YR5/6 明褐色荒砂～細砂 (ラミナ有り・洪水堆積層)
2. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト (粗砂混・鉄分入る)
3. 5Y4/1 灰色粘土 (粗砂混・鉄分多へ行くほど多くなる)
4. 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト質粘土 (粗砂多く混・土器、鉄分入る)
5. 10G4/1 暗緑灰色粘土 (鉄分若干入る)
6. 10GY4/1 暗緑灰色粘土 (炭化物、鉄分入る)
7. 5GY4/1 暗オリーブ灰色細砂混粘土 (雲母、植物遺体若干含む)
8. 5BG4/1 暗青灰色粘土混細砂～極細砂 (雲母、植物遺体多い)
9. 2.5GY5/1 オリーブ灰色中粒砂～粗砂 (雲母多量に入る)
10. 7.5YR4/6 褐色中粒砂～粗砂 (シルトブロック入る)
11. 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト～細砂
12. 2.5Y5/4 黄褐色粘土混粗砂～中粒砂
13. 5Y5/3 灰オリーブ色細砂～極細砂 (ラミナ有り・雲母多い)
14. 7.5GY4/1 暗緑灰色砂質シルト
15. 5GY4/1 暗オリーブ灰色粘質シルト (植物遺体入る)
16. 7.5GY4/1 灰オリーブ色細砂～中粒砂 (雲母、植物遺体入る)
17. 10BG6/1 青灰色中粒砂～細砂 (粘土ブロック、雲母入る)

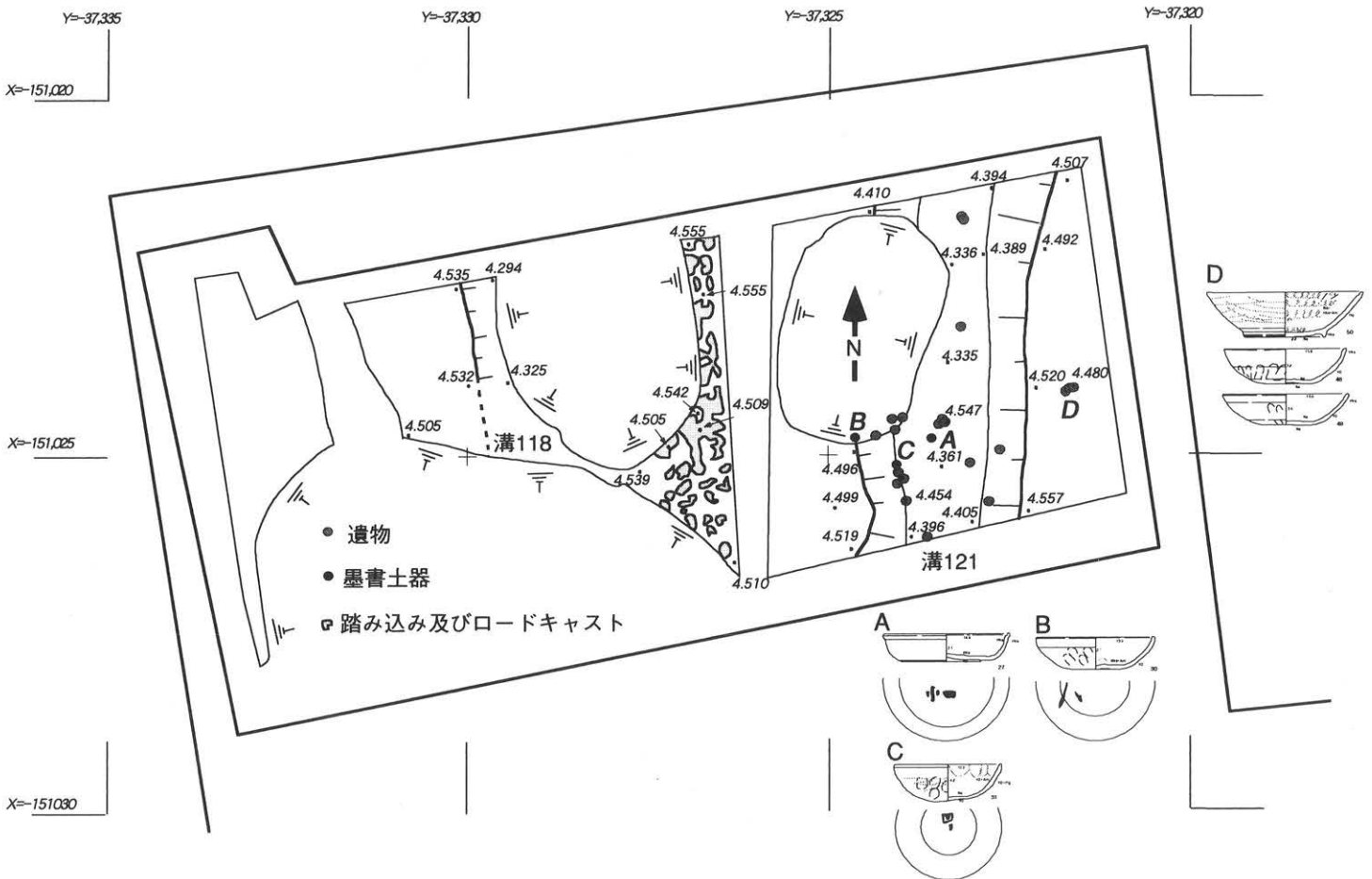


図32 Pit.1 第4面、遺構平面図と遺物の出土地点

ある。座標北に対して8°西に振る方位をとる。東半分と南部は攪乱に削られ、北側はトレンチ外に広がるため本来の規模は不明である。検出規模は、長さ1.5m、幅0.5m、深さ0.25mを呈する。遺物は土師器坏(図44—35)須恵器、製塩土器が出土した。

溝121は、トレンチ東半部で検出した南北溝である。座標北に対して5°東に振る方位をとる。(図32・33)

南北両端がトレンチ外に広がるため、本来の規模は不明である。検出規模は、長さ4.8m、幅2.3m、深さ0.2mを呈する。遺構に溜まった堆積層の観察からは、水の流れた形跡は認められない。遺物は、墨書土器3点をはじめ、多くの土師器坏・皿・鉢、須恵器、製塩土器が出土した(図35～43。詳細については拙稿(池崎1999)を参照)。

踏み込みは、トレンチ中央部で検出した(図32・34)。南北はトレンチ外に広がり、西側は攪乱で削られる。溝118以西には認められない。また溝121以東にも、その広がりには認められない。したがって、東西の広がりについて言えば、溝121による削平を念頭においても、溝118から溝121東辺までの非常に限られた範囲と考えられる。

遺構の年代は、ベース層(9層)から3個体まと

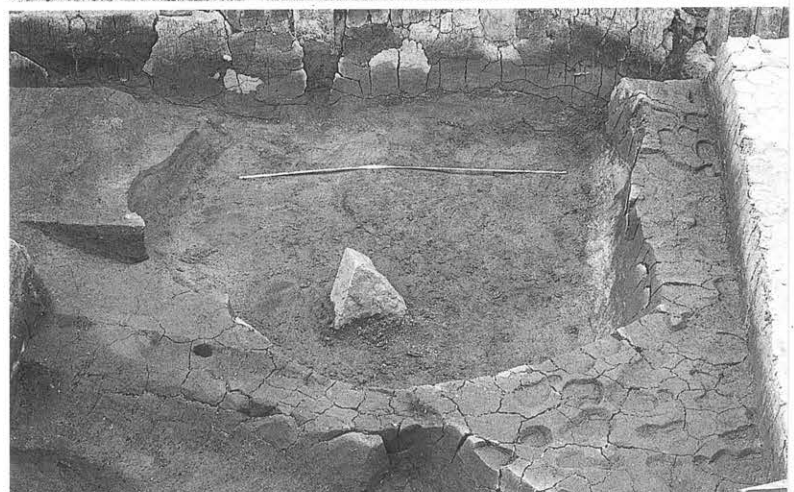
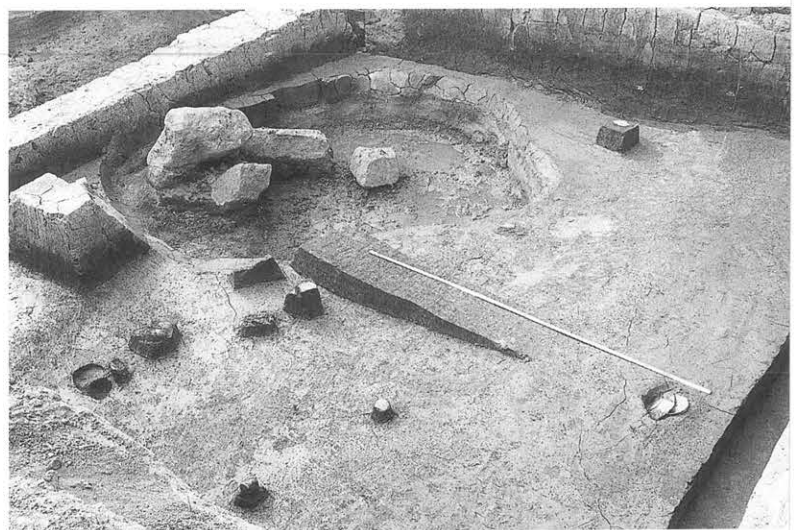


図33 Pit.1 東側、第4面、遺構検出状況
スケールは2m 南東から撮影(上)

図34 Pit.1 中央、第4面、遺構検出状況
南から撮影(下)



図 35 溝 121 出土墨書土器 「四小」



図 36 溝 121 出土墨書土器 「四口」

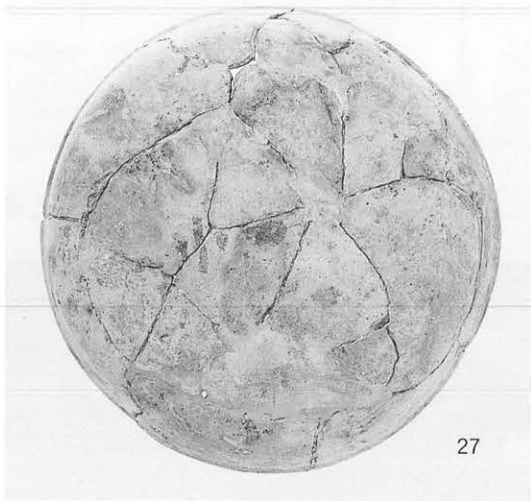


図 37 溝 121 出土墨書土器 30 「口」

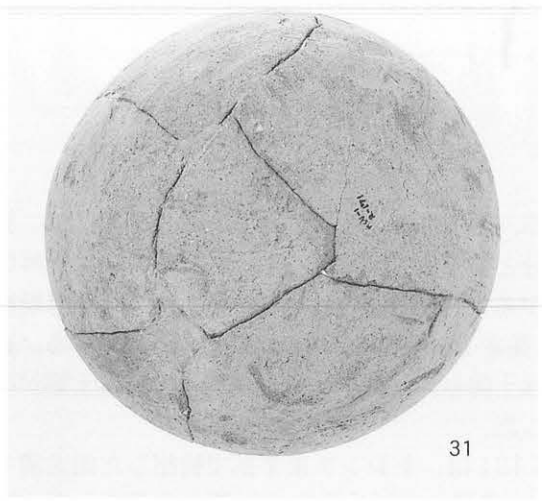


図 38 墨書土器 31
「四口」部分の赤外線写真

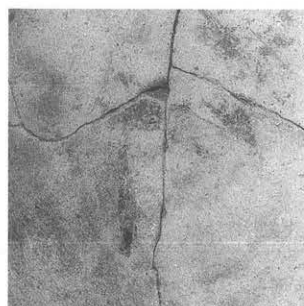


図 39 墨書土器 30
墨書部分の赤外線写真

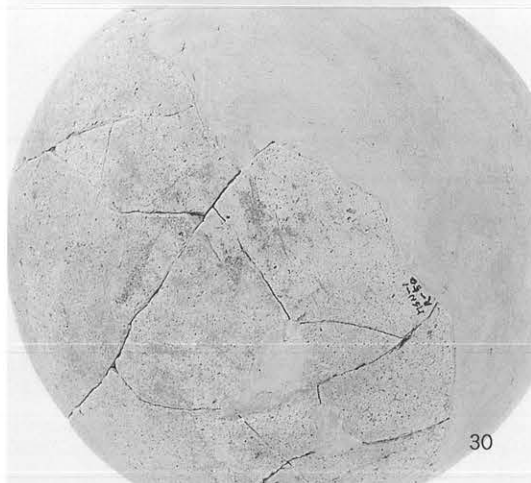


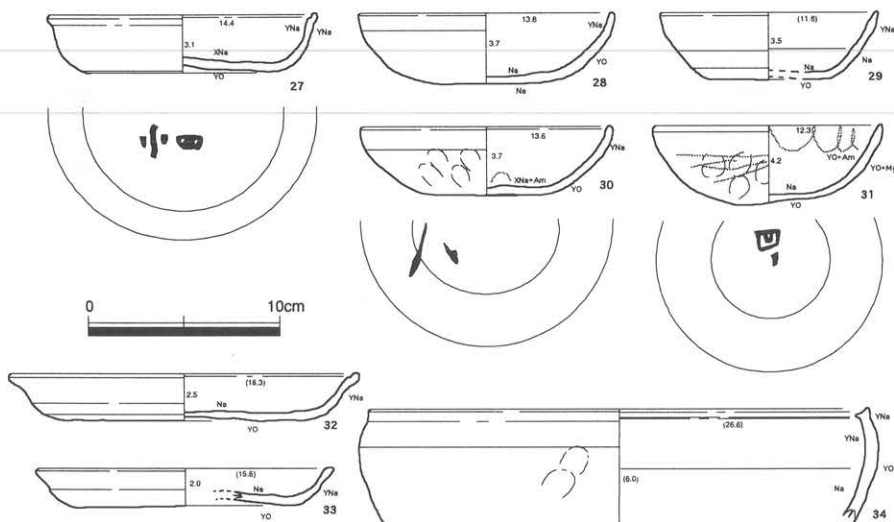
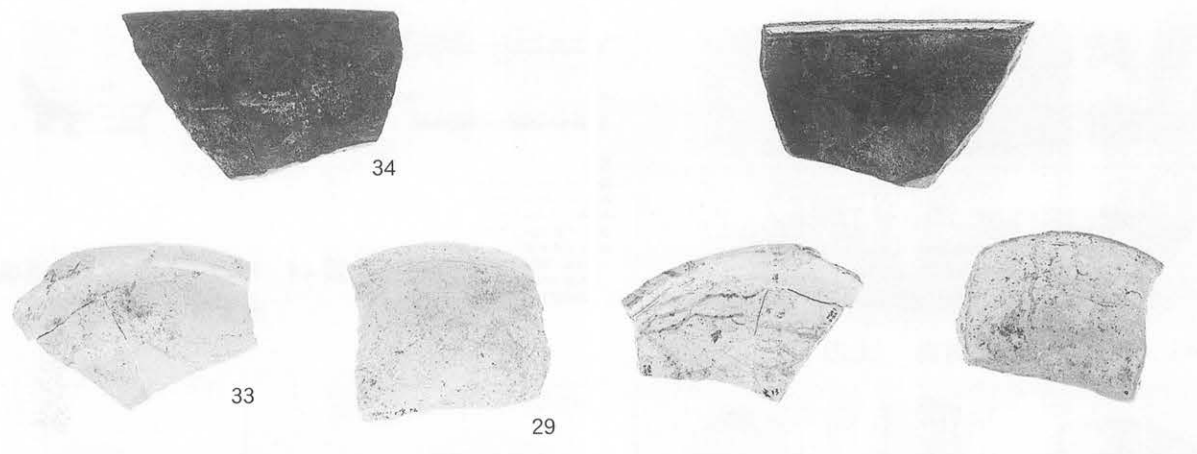


図40 溝121出土遺物(その1)



図41 溝121出土遺物(その2)

図42 溝121出土遺物(その3)



凡例
 Na=ナデ YNa=ヨコナデ
 Am=暗文 INa=イタナデ
 NM=布目 K=ケズリ
 Ik=ハケ目 Mg=ミガキ
 YO=ユビオサエ
 ++の後 XNa=不定方向のナデ
 /-方向 (Y=横,T=縦,N=斜め)
 ()内は復元した数値

図43 Pit.1 溝121
出土遺物実測図

まって出土した(図50)土師器坏・椀(図49-48~50)の年代観や、溝121内出土遺物の年代観などから、9世紀前半の時期と考えられる(後述)。

第5面(24層上面)

現地表面より約1.4m下(TP+4.3m)の部分で溝を1条検出した。

溝125は、トレンチ東で検出した南北溝である。座標北に対して13°西に振る方位をとる。

南北両端は、トレンチ外に広がるため、本来の規模は不明である。検出規模は、長さ5.2m、幅0.8m、深さ0.25mを呈する。遺物を全く含まず、水の流れを示す埋土の堆積状況が認められることから、自然に埋積したものと考えられる。

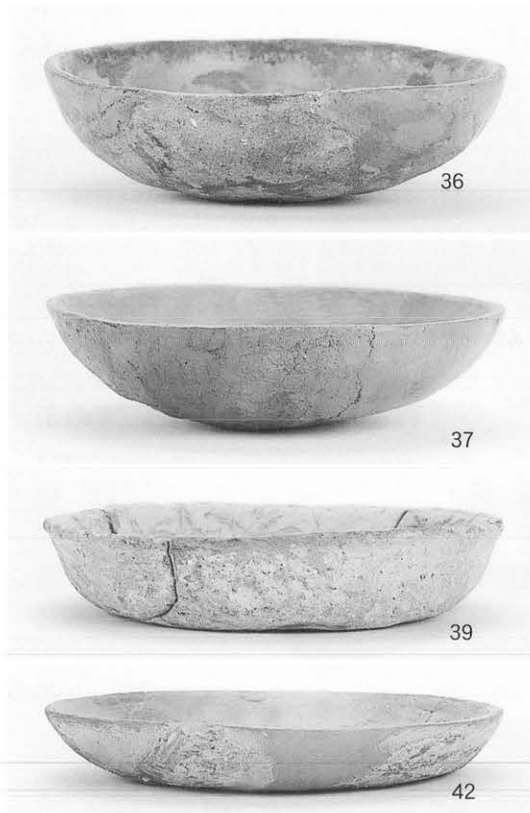
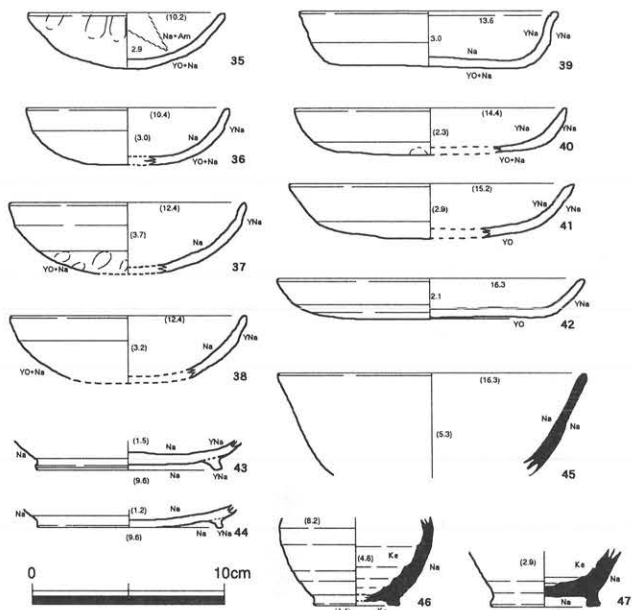


図45 Pit.1 7層出土遺物 (その1)



凡例
 Na=ナデ YNa=ヨコナデ
 Am=暗文 INa=イタナデ
 NM=布目 Ke=ケズリ
 Hk=ハケ目 Mg=ミガキ
 YO=ユビオサエ
 +=の後 XNa=不定方向のナデ
 /方向 (Y=横,T=縦,N=斜め)
 ()内は復元した数値

図44 Pit.1 7層および遺構出土遺物実測図

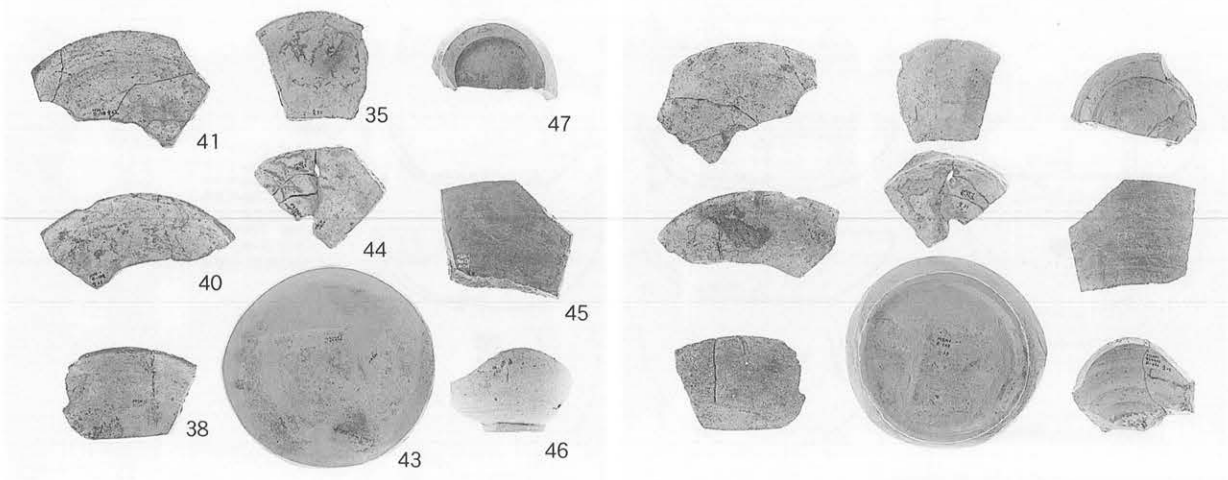


図46 Pit.1 7層および遺構出土遺物 (その2)



図47 Pit.1 溝121ベース層出土遺物 (その1)



図48 Pit.1 溝121ベース層出土遺物 (その2)

凡例
 Na=ナデ YNa=ヨコナデ
 Am=暗文 INa=イタナデ
 NM=布目 Ke=ケズリ
 Hk=ハケ目 Mg=ミガキ
 YO=ユビオサエ
 +=の後 XNa=不定方向のナデ
 /方向 (Y=横,T=縦,N=斜め)
 ()内は復元した数値

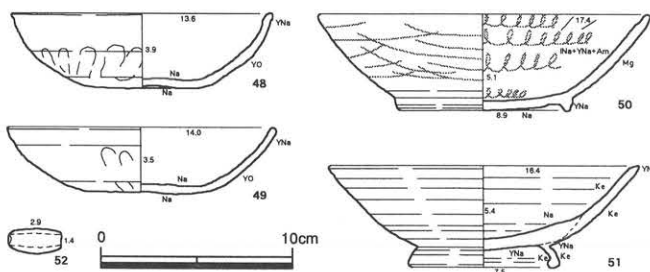


図49 Pit.1 溝121ベース層出土遺物実測図

図50 Pit.1 溝121ベース層遺物出土状況 西から撮影



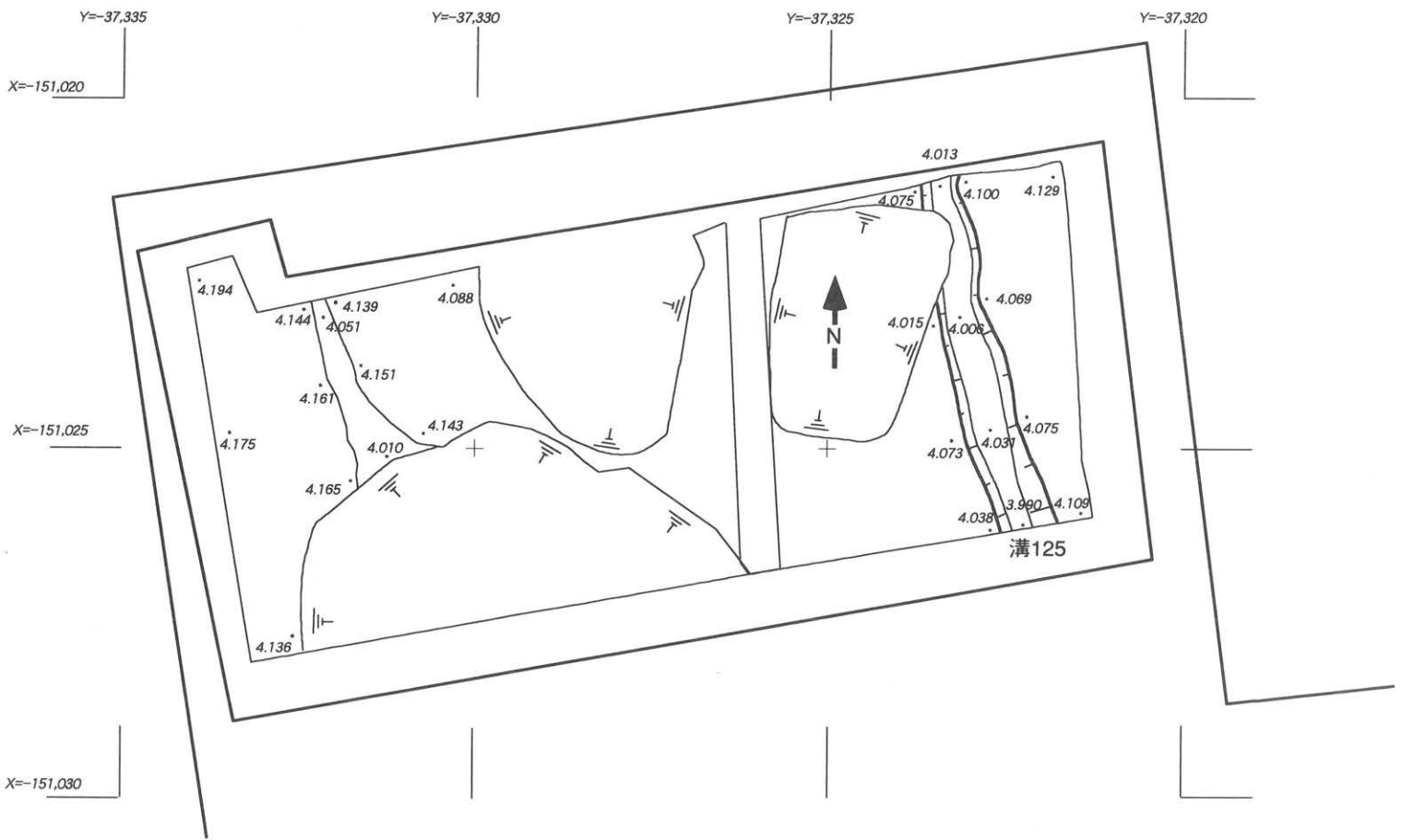


図51 Pit.1 第5面、遺構平面図

この遺構の時期は、遺構から全く遺物が出土しないこと、また下層の調査を行っていないことから、明確にできない。しかし、上位の遺構面の年代観や、ベースとなっている砂層の年代観、周辺の調査成果から、概ね古墳時代以降、奈良時代後半までと考えられる。

3.3 Pit.2

このトレンチは、マンション建設予定地内（以下予定地）の北西、Pit.1の南に位置する、立体駐車場建設予定地である。規模は6.4×21.2mの長方形を呈する。

東側約1/3は、土地造成の際の産業廃棄物投棄場によって攪乱されていた。また西側にも、約4.3×3.5mの規模の攪乱（産業廃棄物投棄場）が認められた。

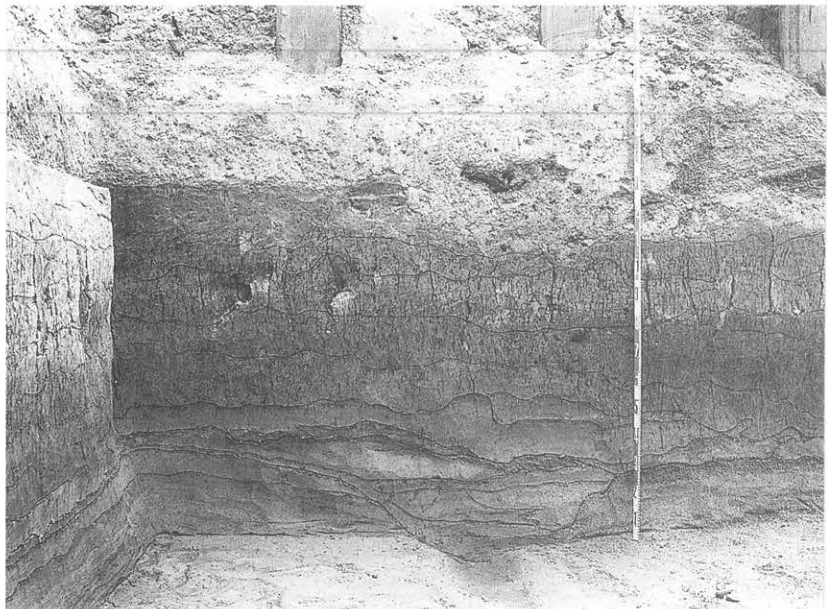


図52 溝125南壁断面

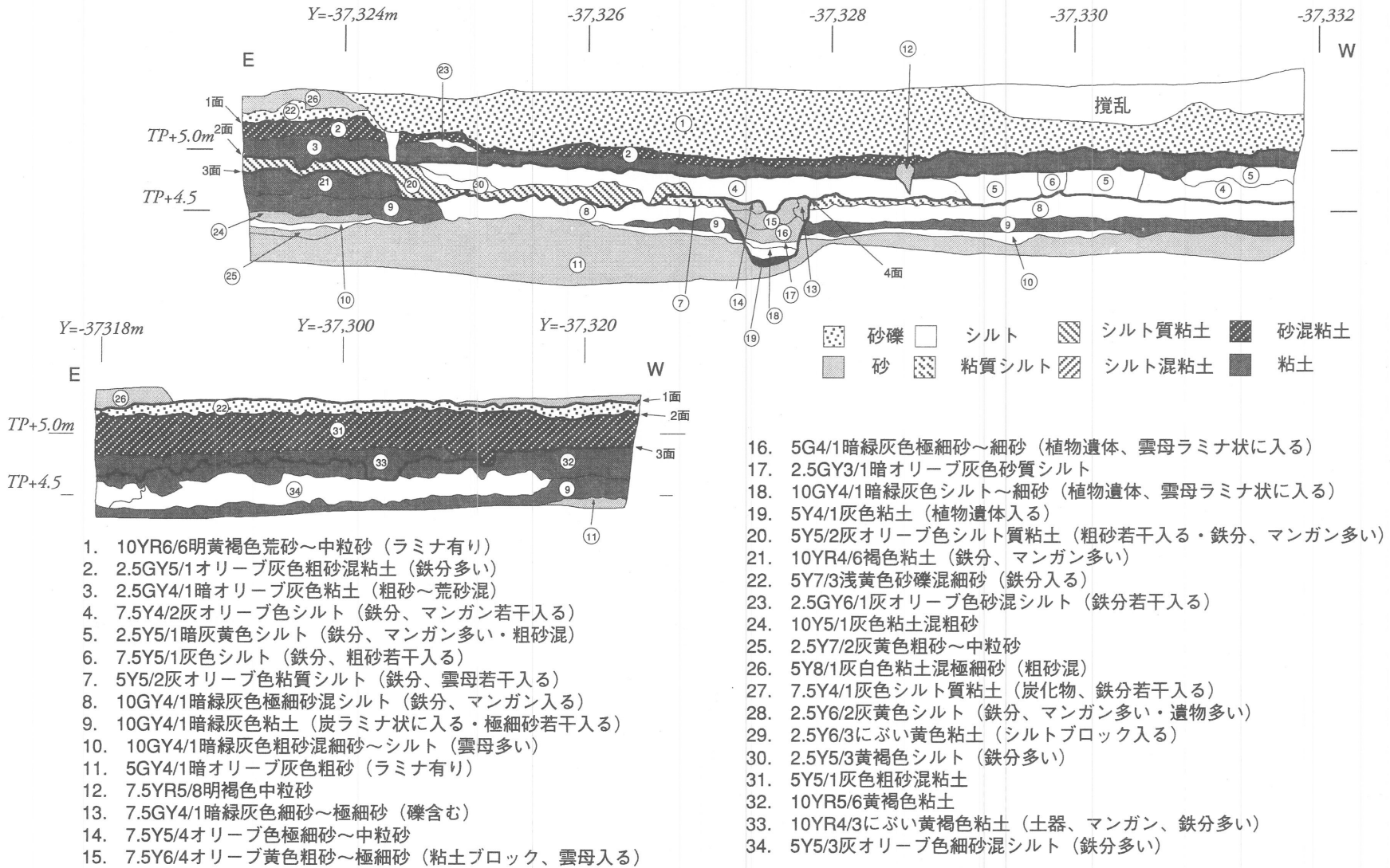
3.3.1 Pit.2の層序

今回の調査では4つの遺構面と、遺物包含層を確認した。

このトレンチの層序は以下のとおりである。

- 1層 10YR6/6明黄褐色荒砂～中粒砂（ラミナ有り・洪水堆積層）
- 2層 5Y8/1灰白色粘土混極細砂（粗砂混）【断面図26層】
- 3層 5Y7/3浅黄色砂礫混細砂（鉄分入る）【断面図22層】
- 4層 2.5GY5/1オリブ灰色粗砂混粘土（鉄分多い）【断面図2層】
- 5層 2.5GY4/1暗オリブ灰色粘土（粗砂～荒砂混）【断面図3層】

図 53 Pit.2 南壁断面図



- 6層 7.5Y4/2灰オリーブ色シルト(鉄分、マンガン若干入る){断面図4層}
 7層 5Y5/2灰オリーブ色シルト質粘土(粗砂若干入る・鉄分、マンガン多い){断面図20層}
 8層 10YR4/6褐色粘土(鉄分、マンガン多い){断面図21層}
 9層 10GY4/1暗緑灰色極細砂混シルト(鉄分、マンガン入る){断面図8層}
 10層 10GY4/1暗緑灰色粘土(炭ラミナ状に入る・極細砂若干入る){断面図9層}
 11層 10Y5/1灰色粘土混粗砂{断面図24層}
 12層 10GY4/1暗緑灰色粗砂混細砂～シルト(雲母多い){断面図10層}
 13層 5GY4/1暗オリーブ灰色粗砂(ラミナ有り){断面図11層}

3.3.2 遺構と遺物

トレンチ中央部分に設置した、土層観察用のアゼで東西に2分した。以下西半、東半で記載する。

第1面(西半2層上面・東半22層上面)

西半では、中央アゼ際から西に落ちる段が認められる。段の高低差は、最も大きなところで0.3m。近世以降の洪水堆積層と考えられる砂礫層によって、遺構面は大きく削平され(西端部分では下位面上部まで削平されている。)、遺構はほとんど認められない。北東部のアゼ際で、土壙を検出した。

土壙201は、現地表面より下約0.8mで検出した。攪乱によって西半分と南が削られており本来の規模は不明である。検出規模からは、一辺約1mの方形を呈すると推定できる。深さは約0.7m。遺物は土師器細片が出土したが、図化可能なものはない。

東半では、現地表面より約0.4m下の部分で、土壙・井戸などの遺構を検出した。上面は削平を受ける。

土壙202は、南東部で検出した。一辺約2mの隅丸方形を呈し、深さは0.4m。遺物は、土師器細片が出土したが、図化可能な物はない。

しっくい土壙201は、北東部で検出した。直径約0.5mの円形を呈し、深さは0.1m。

遺物の出土はなく、底部・周囲をしっくい固める。上部は削平を受けており、本来の深さは不明である。

土壙205は、北西部で検出した。西はアゼの中に、北はトレンチ外に広がるため、本来の規模は不明である。検出規模から、直径約0.8mの不整円形を呈すると考えられる。深さは0.2m。遺物の出土はない。

この面検出の遺構内からは、ほとんど遺物の出土がないため、遺構の時期の詳細は不明であるが、直上の砂層の年代観などから、おおよそ中世以降の時期と考えられる。

第2面(西半3層下面・東半31層上面)

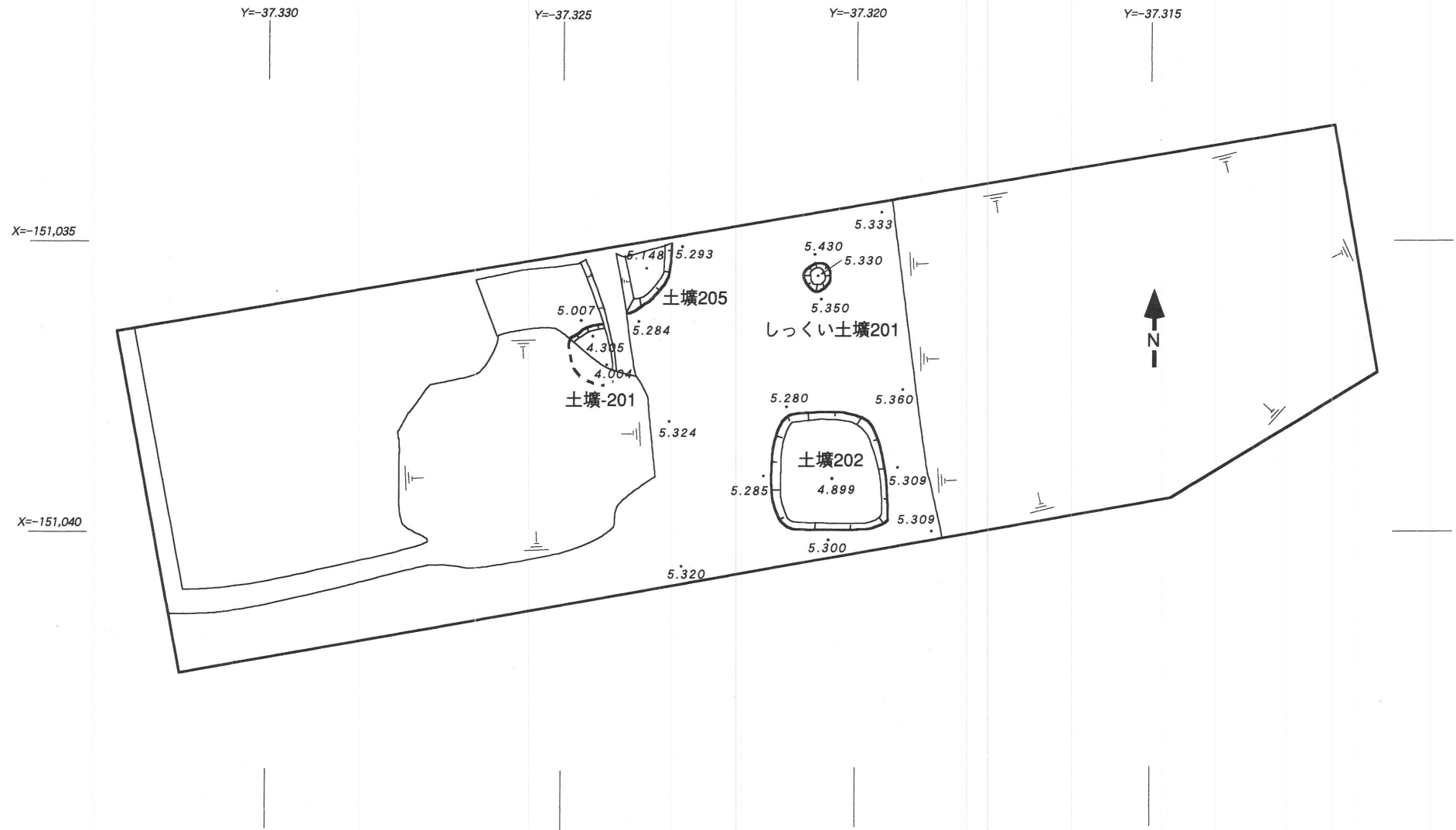
西半では、現地表面より約1.1m下の部分で、土壙および溝を検出した。上面は削平を受ける。

土壙210は、中央部攪乱の西側で検出した。東側を攪乱に削られる。一辺1.1mの隅丸方形を呈し、深さは0.4m。遺物の出土はない。

ピット210は、中央やや西より、土壙210と溝214との間で検出した。東西0.35m、南北0.5mの不整円形を呈し、深さは0.04m。遺物の出土はない。

溝214は西端に位置する南北溝である。南北座標にほぼの方位をとる。南

図 54 Pit.2 第 1 面、遺構平面図



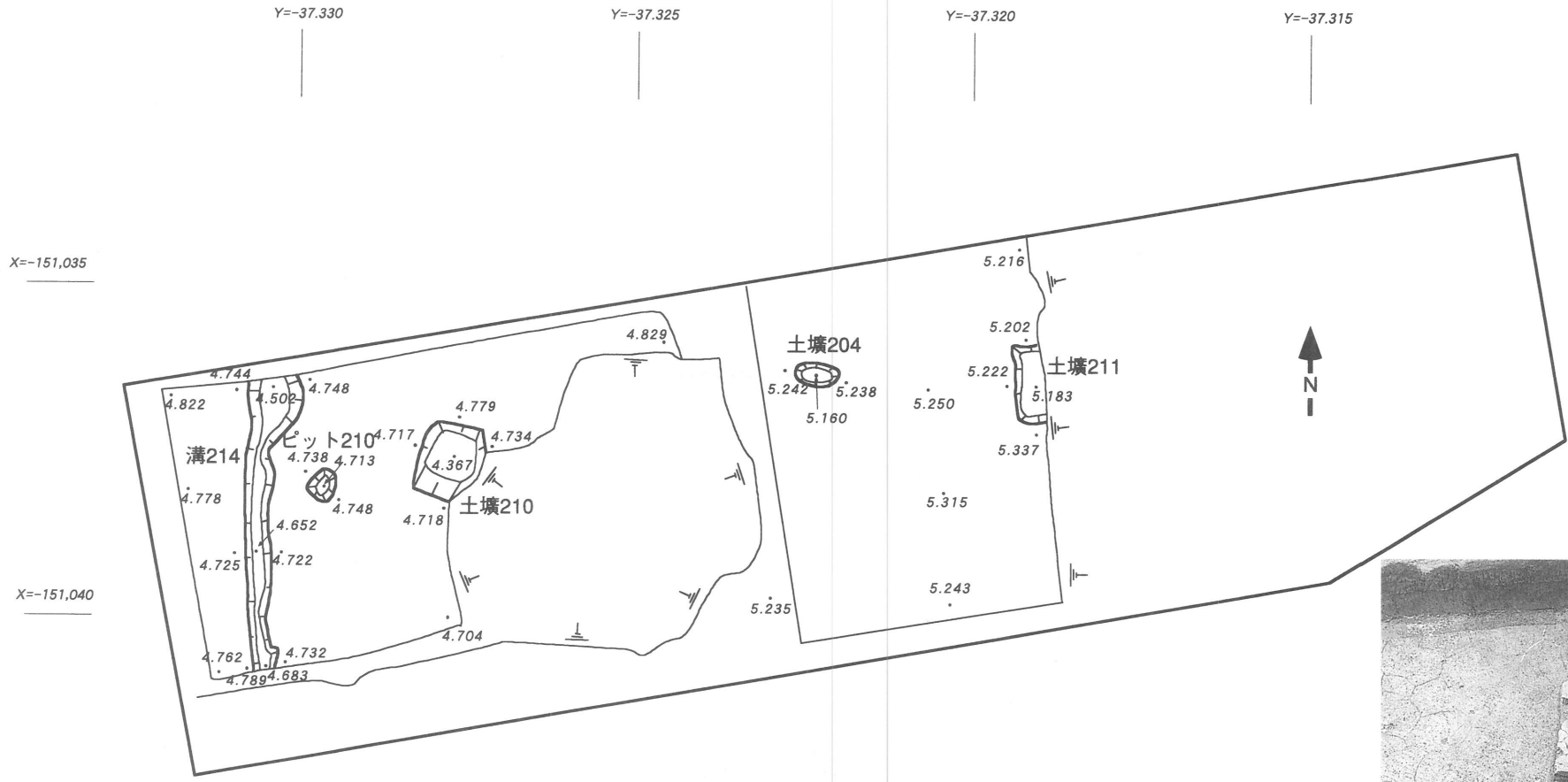


図55 Pit.2 第2面、遺構平面図

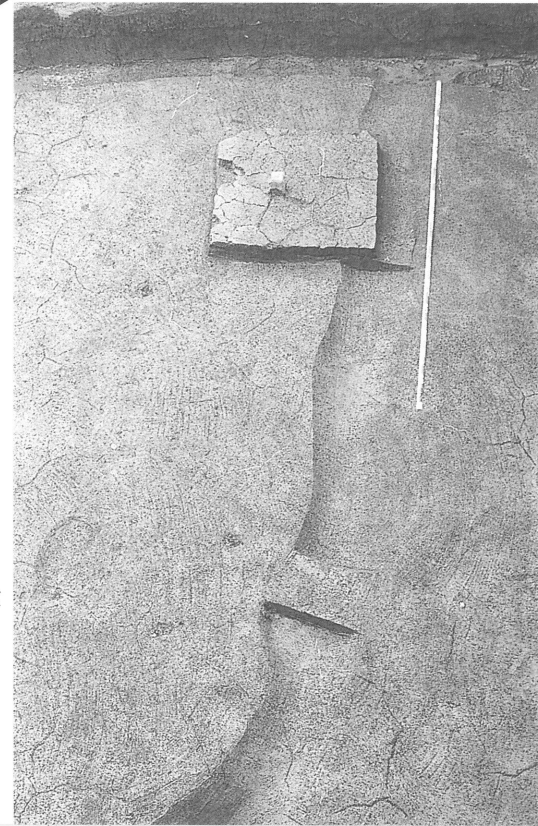


図56 Pit.2 西半、第2面、溝214およびピット210検出状況 (スケールは2m 北から撮影)

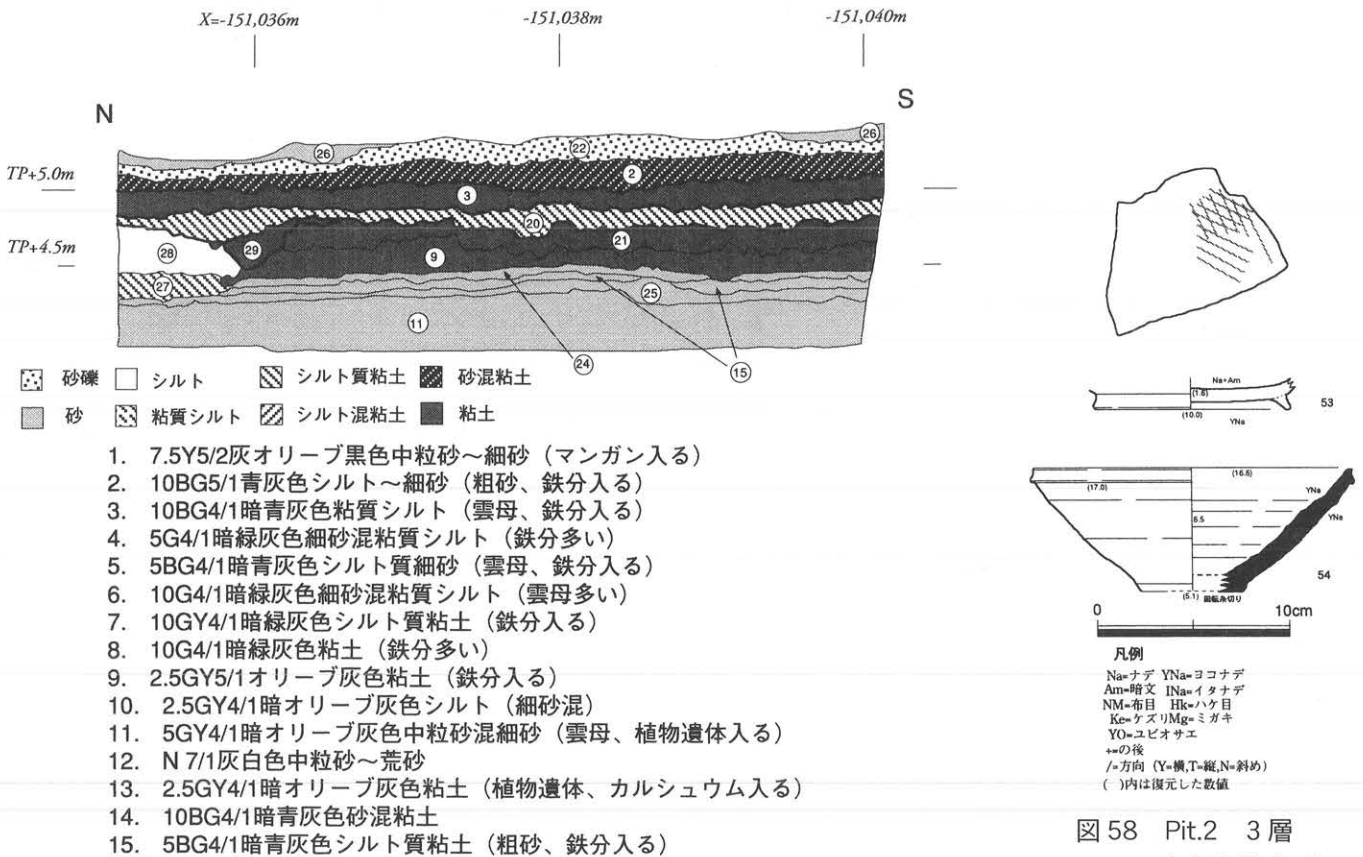


図 58 Pit.2 3層
出土遺物実測図

図 57 Pit.2 中央、南北アゼ東壁断面図

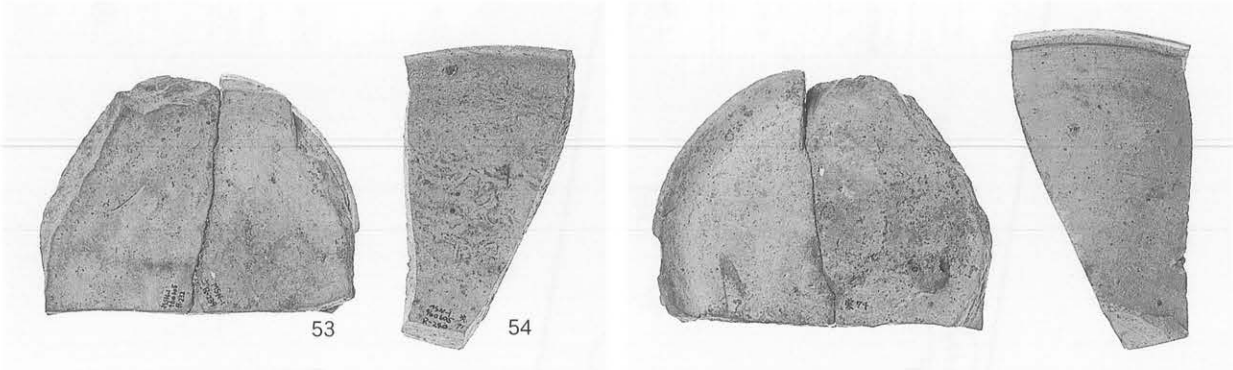


図 59 Pit.2 3層出土遺物

北両端は、トレンチ外に広がるため、本来の規模は不明である。検出規模は、幅0.35m、全長4.5m、深さ0.25mを呈する。遺物は、土師器・製塩土器などが出土したが図化可能な物はない。

東半では、現地表面より約0.5m下の部分で、土壌を検出した。

土壌204は北西部分で検出した。東西0.7m、南北0.35mの不整円形を呈し、深さは0.1m。遺物の出土はない。

土壌211は、東端で検出した。東半分は攪乱で削られる。検出規模から、一辺1.1mの隅丸方形を呈すると考えられる。深さは0.15m。遺物の出土はない。

この面の遺構内からは、遺物の出土がなく、直接時期を決めるのは困難である。上位の遺構面の年代観から、おおよそ中世前半と考えられる。

第3面（西半21層上面・東半32層上面）

この面は、西半部の東より（南北アゼの西側）で西落ちの段が作られる。段の高低差は0.2m。西半では、現地表面より約1.2m下の部分で溝を検出した。

溝220は、西部で検出した南北溝である。座標北に対し、5.5°西へ振る方位をとる。幅1.0m、長さ4.0m、深さ0.1mの規模を呈する。遺物は土師器細片な

Y=-37.330

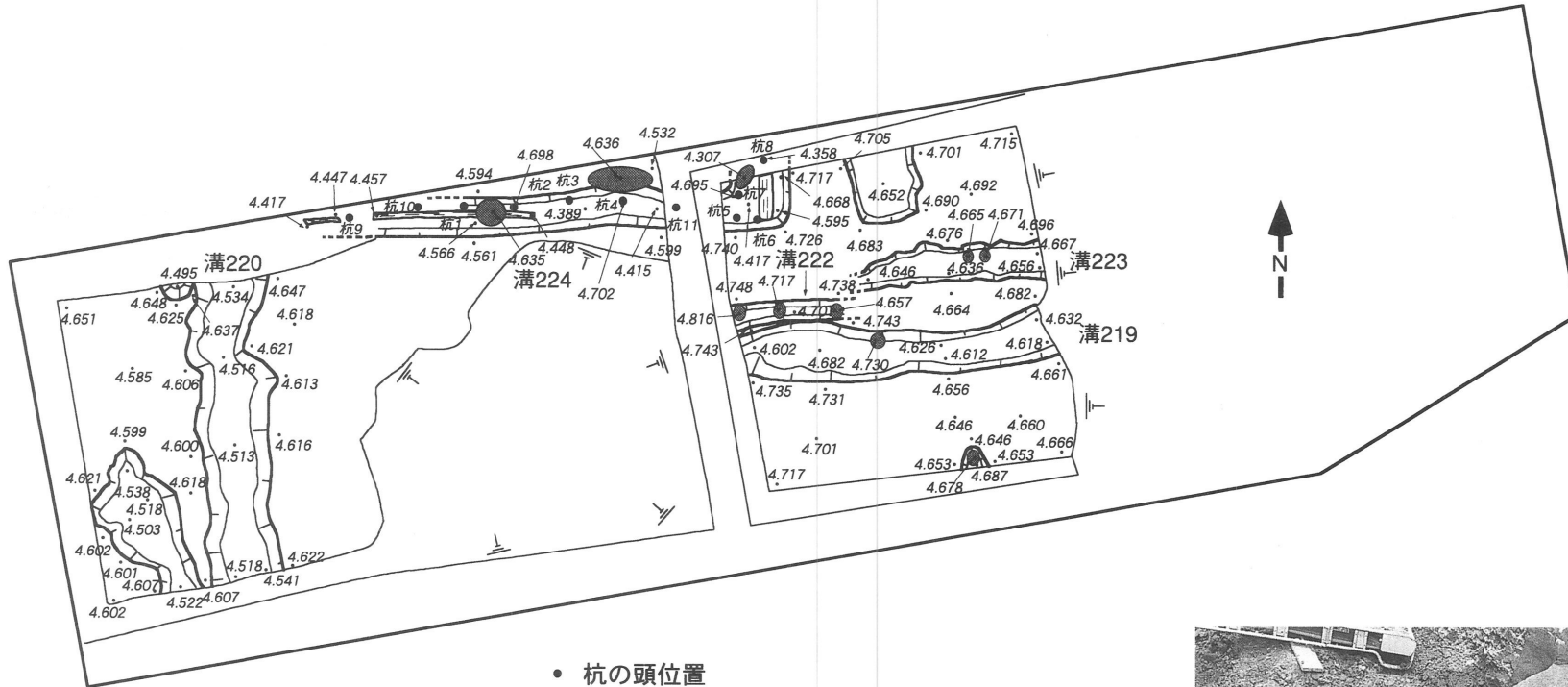
Y=-37.325

Y=-37.320

Y=-37.315

X=-151.035

X=-151.040



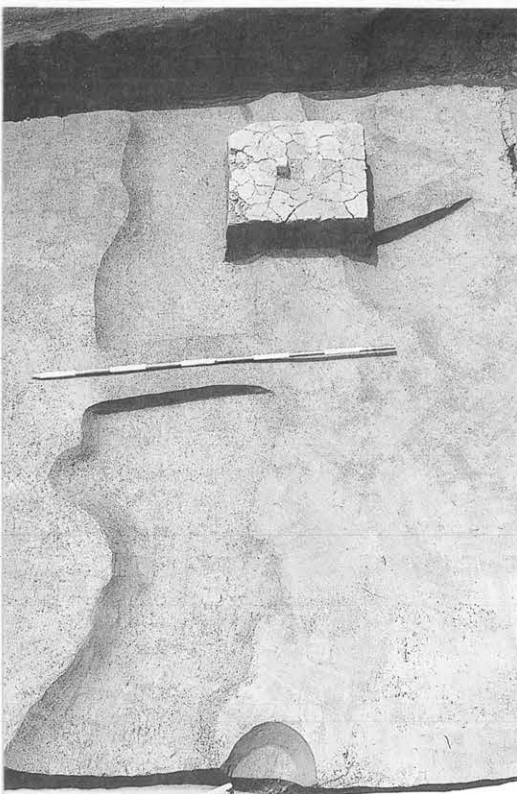
- 杭の頭位置
- 土器が密集して出土した所



図60 Pit.2 第3面、遺構平面図

図61 Pit.2東半、第3面、遺構検出状況北西から撮影

図62 Pit.2 西半、溝 220 検出状況
北から撮影（左）



どが出土したが、図化可能な遺物はない。

溝224は、北壁沿いで検出した、内部に板材と杭を用いた構造物を持つ、L字型の溝である。西端部はトレンチの北側に広がり、東端部はトレンチ中央に設置した南北アゼの東側ではほぼ直角に北上し、トレンチの外に広がる。東西溝部分では、座標東に対し、5°南に振る方位をとり、南北溝部分では、座標北に対し、3°西に振る方位をとる。しかし、北に隣接するPit.1のトレンチには続きは認められず、本来の形は不明である。

溝は東端部（屈曲点より）から西に、長さ6.5m以上、幅0.6m。北へは、長さ1.0m以上、幅0.8m以上、深さは検出面から0.2mの規模を呈する。

南北溝の部分では、溝の東肩から約0.5mの場所に、長さ約1.0mで5cm角の角柱を2本、約0.8m間隔で打設する。角柱打設の角度は、西肩から東肩へ向けた、水平面に対しおおよそ60°（図66・67）。

溝の中には、角柱の東側に、水平面に対し41°の角度で、厚さ約2cm、幅約20cmの板材を設置する。

東西溝の部分でも、南北溝と同様の構造がみられ、角柱の間隔は0.6～0.8mで8本分検出した。

角柱は溝の北肩から南肩へ向け、60°～80°の角度で打設する。板材は溝内部に、杭の角度にもたれる状態で設置される。板材1枚の全長については、腐朽により認められない部分があるため不明であるが、その痕跡から検出した溝の全長にわたって、設置されたことがわかる。

また、板材を固定した痕跡や、裏込め的な礫などの堆積が認められないことから、板の上端が角柱によって、下端は溝の底によって留まっていたものと思われる。

溝に溜まった堆積層の観察から、この溝には水の流れた痕跡は認められず、人為的に埋められた形跡もないことがわかる。したがって、この状況から、常時滞水したいわゆる「どぶ」状であったと溝の性格は理解できる。すると、杭や板を用いての護岸自体の必要性の他に、次のような疑問が生まれる。1.水流のない溝に対する護岸としては、杭の長さや、打設の規模が大きい。2.杭を傾斜させて打設する意味。3.杭・板共に片側だけに設置する。4.側壁にあたる板が、溝の底部に設置され、それを留めるための裏込めなどが見られない。などである。

現時点では、近隣に類例は認められず、また遺構自体も、調査範囲の制限から全体を検出する事ができなかったため、溝の性格と、構造物との疑問点の提示にとどめる。

遺物は、溝埋土上層より土師器皿や坏など多くの遺物が出土した（図68～70）が、溝の埋土下部からの遺物の出土はない。

東半では、現地表面より約1.1m下の部分で溝3条とピット状遺構を検出した。

溝219は、中央部分で検出した東西溝である。東端は攪乱により削られ

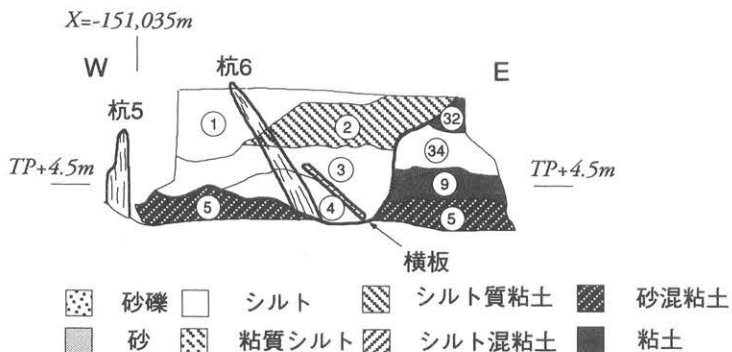


図63 第2面、溝 224 近景
西から撮影（中）
スケールは2m

図64 第2面、溝 224 屈曲部
北から撮影（下）

図65 第2面、溝 224 検出状況
南東から撮影（右）
スケールは2m





1. 5Y7/2灰白色粗砂混シルト (鉄分、土器混)
2. 5Y5/2灰オリーブ色シルト質粘土 (鉄分入る)
3. 7.5Y5/1灰色シルト (鉄分多い)
4. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルト (鉄分若干入る)
5. 5Y4/1灰色砂混粘土 (鉄分若干入る)

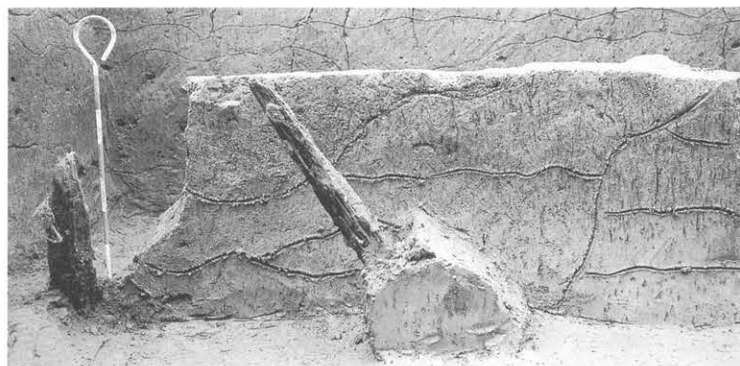


図 66 溝 224 屈曲部南壁断面 (右)

図 67 溝 224 屈曲部南壁断面図 (左)

る。西側は、西半部の攪乱により削られる。トレンチ西半部にはその痕跡は認められない。したがって全体の規模は不明であるが、検出規模は長さ4.3m以上、幅0.7m、深さ0.05mを呈する。座標東に対して、3°北に振る方位をとる。遺物は、土師器皿・坏などが出土した。(図73・74)

溝222は、溝219の北側に隣接して検出した東西溝である。西側は攪乱で削られており、東側は途中で消滅している。したがって本来の規模は不明である。検出規模は長さ1.5m、幅0.4m、深さ0.05mを呈する。座標東に対して3.5°北に振る方位をとる。遺物は土師器坏・甕、須恵器甕・坏蓋、製塩土器などが出土したが、図化可能なものはない。

溝223は、溝219の約0.7m北側で検出した東西溝である。東側は、攪乱で削られ、西側は途中で消滅する。したがって本来の規模は不明であるが、検出規模は長さ2.7m、幅0.5m、深さ0.04mを呈する。座標東に対して、2.5°北に振る方位をとる。遺物は土師器皿・坏・甕、須恵器坏蓋などが出土したが図化可能なものはない。

これら遺構の時期は、遺構内出土の遺物や、遺構の上位にある堆積層の年代観から、8世紀末～9世紀前半と考えられる。

また、トレンチ中央にある西落ちの段は、Pit.1では、攪乱のため明確ではない。しかし、同トレンチでは、段の延長線上より西側の部分で踏み込み状遺構を検出していることから、本来段が連続していた可能性も考えられる。また、段の上下で溝の方向が違うことは、段によって土地の使い方



図 68 溝 224 上層出土遺物 (その 1)

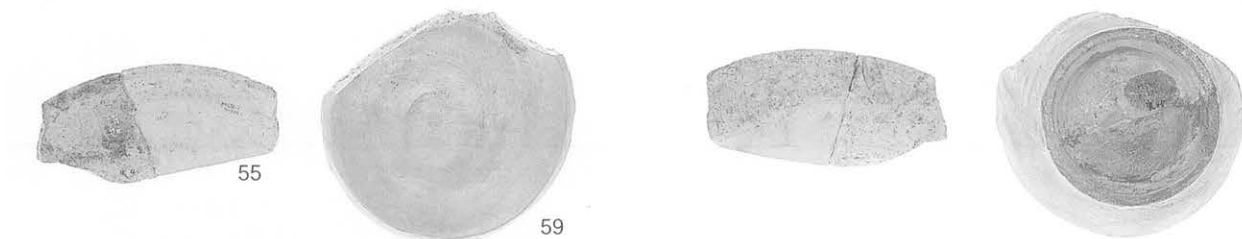


図 69 溝 224 上層 56 出土遺物 (その 2)

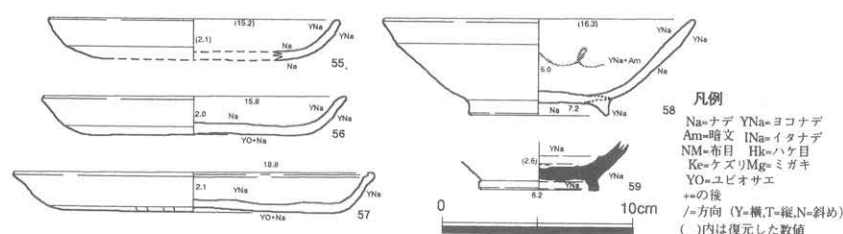
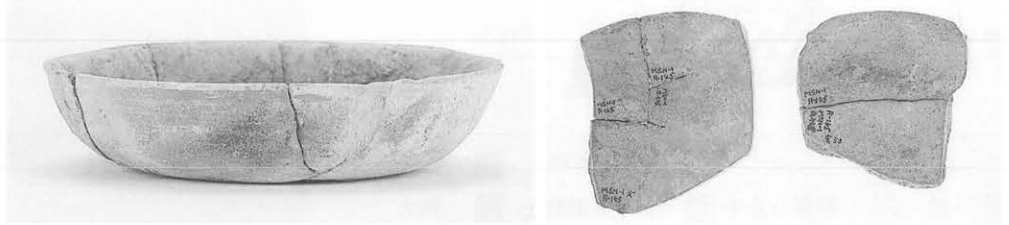


図 70 溝 224 上層 出土遺物実測図

図71 Pit.2 東半、
33層出土遺物



凡例
 Na=ナデ YNa=ヨコナデ
 Am=暗文 INa=イタナデ
 NM=布目 Hk=ハケ目
 Ke=ケズリMg=ミガキ
 YO=ユビオサエ
 +=の後
 /=方向 (Y=横,T=縦,N=斜め)
 ()内は復元した数値

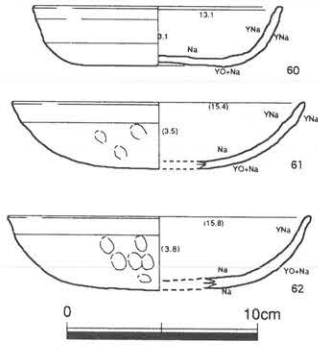


図72 Pit.2 東半、33層
出土遺物実測図

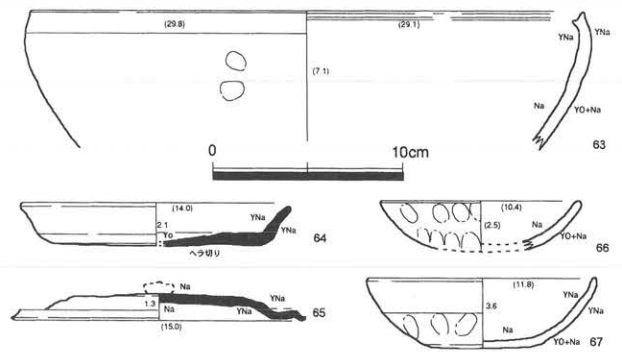


図73 溝219 出土遺物実測図

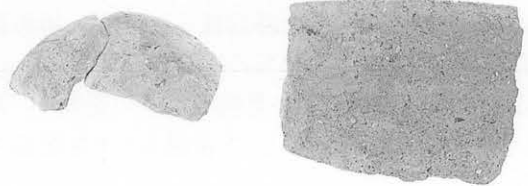
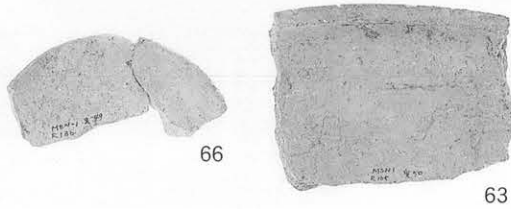
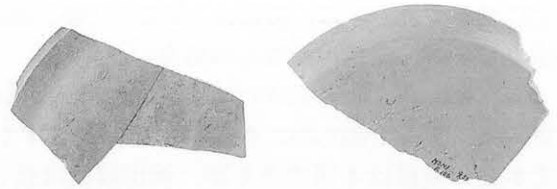
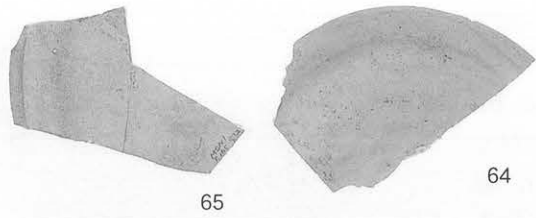


図74 溝219 出土遺物

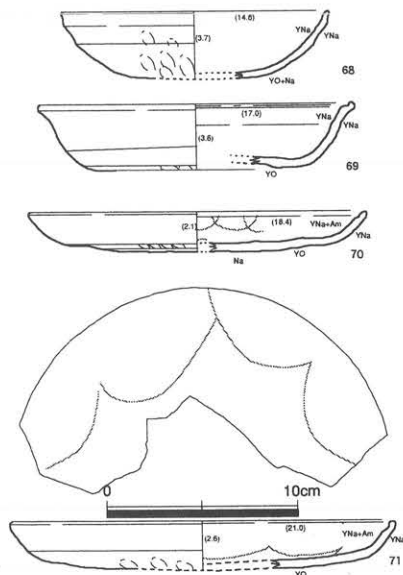


図75 Pit.2 東半北側、20層出土遺物実測図 (左)

図76 Pit.2 東半北側、20層出土遺物 (上)



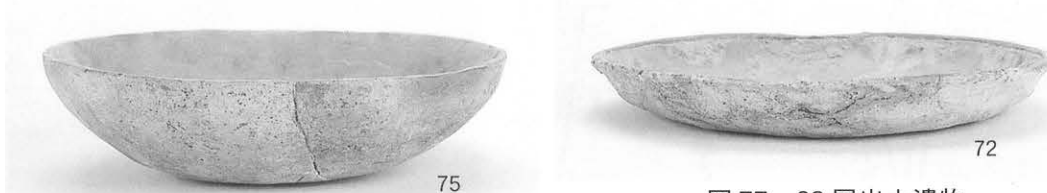
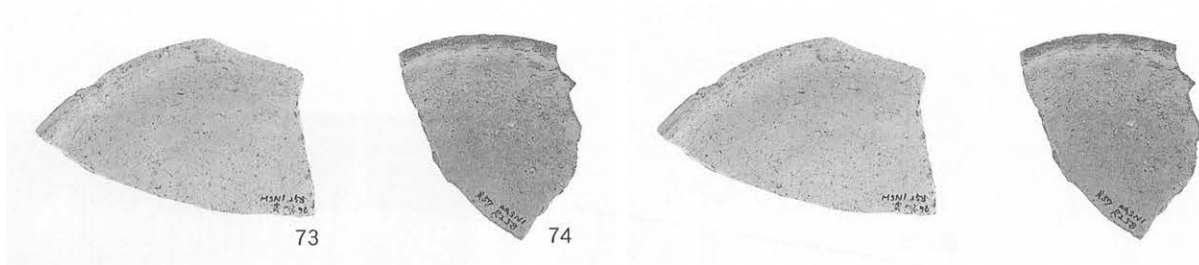


図 77 28層出土遺物

図 78 28層出土遺物実測図

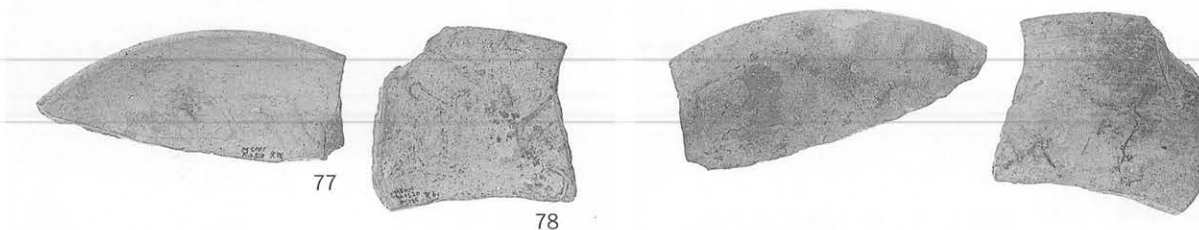
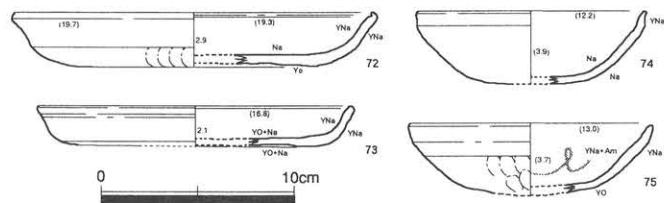


図 79 9層出土遺物

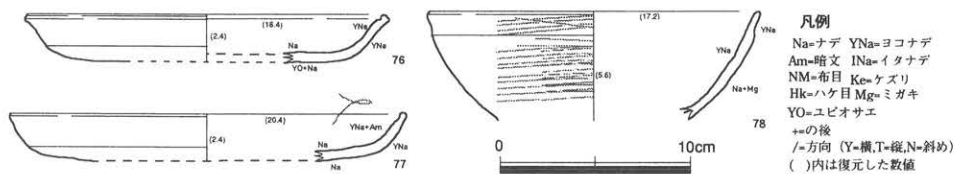


図 80 9層出土遺物
実測図

に何らかの変化を持たせたものと考えられる。

第4面 (7層上面)

西半部の中央、現地表面より約1.3m下の部分で溝を検出した。

溝215は座標北に対して11°西に振る方位をとる南北溝である。

南北端はトレンチの外に広がり本来の規模は不明である。しかし、方向や位置関係から同一と考えられる溝が、Pit.1の西側で検出しており(溝115)、前述した通り、全長21m超を想定できる。また上面は削られており本来の深さは不明であるが、検出した規模は幅0.75m、深さは0.5mを呈する。溝内の堆積層は、滞水状態と緩やかな流れが交互に存在し、自然に埋積したことを示しており、水路であったと考えられる。

遺物の出土がないため、直接的な時期は不明である。しかし、北側では溝224が、この溝埋没後に上面を削って開削されていることから、9世紀の初頭には

Y=-37.330m

Y=-37.325

X=-151.035m

X=-151.040

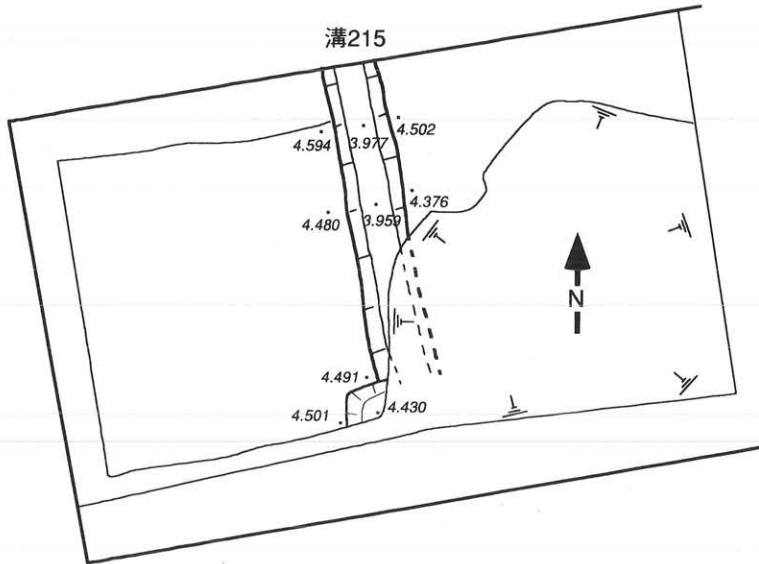


図 82 Pit.2 西半部、溝215検出状況南から撮影

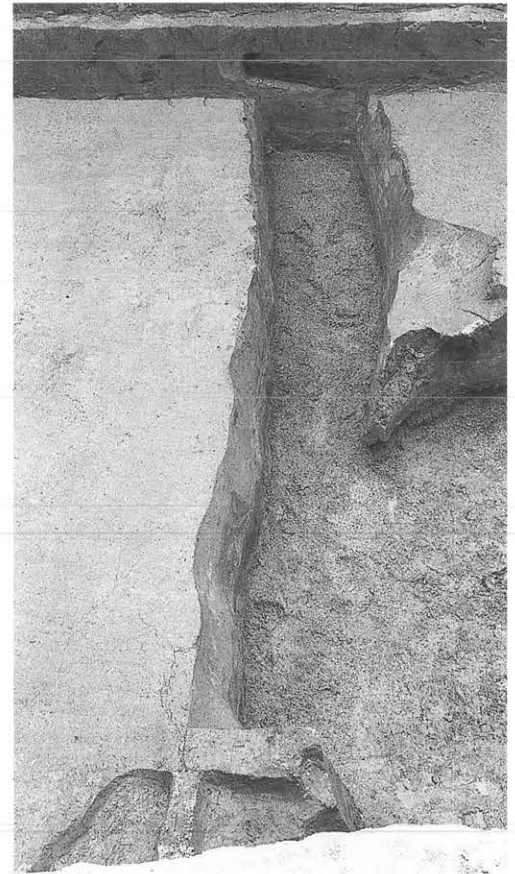


図 81 Pit.2、第4面、遺構平面図 埋没していたと考えられる。

3.4 土取り穴

土取り穴は、Pit.1とPit.2の間に位置し、Pit.2の北東に隣接する。(図3)

このトレンチは、当初の調査計画や工事計画にはなく、建設工事の進捗に伴って掘削されたものである。

5月24日の朝、マンション本体部分の基礎埋め戻しの土量が不足したとして、重機が調査トレンチの間を掘削しはじめた。前日に行った工程会議の席上ではこのような工程は議案として上がっておらず、予想外の出来事であった。

掘削穴の断面や掘削面から、遺物や遺構が認められたため、この部分の調査について、市教委に対応を求めた。市教委と建設現場担当者との協議の結果、市教委からは「必要なら調査経費の範囲で立ち会い調査をせよ」との指示が出された。そこで24日・25日の両日にわたり、延べ2名のアルバイトを動員して、立ち会い調査を行った。土取りは最終的に、

東西約6m、南北約3m、深さ1.6mの規模で、計約30m³の土量を掘削したことになる。作業は重機の作業(掘削・搬出)の合間をぬって、遺物の採取と掘削坑北壁を精査、断面の略図を作製した。

図 83 土取り直後の様子南西から撮影



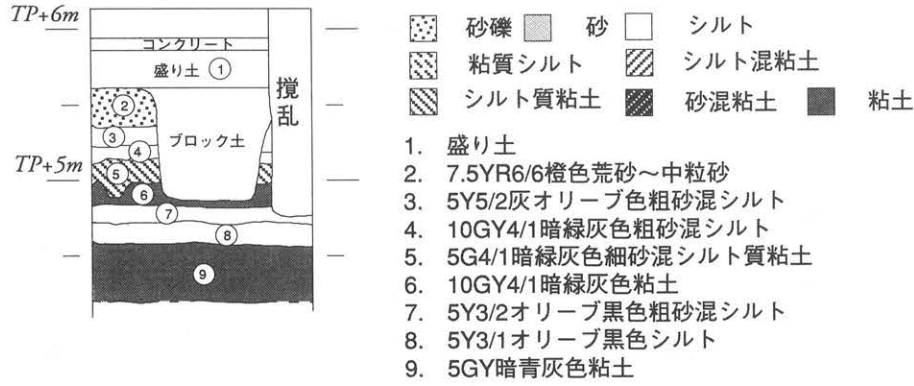
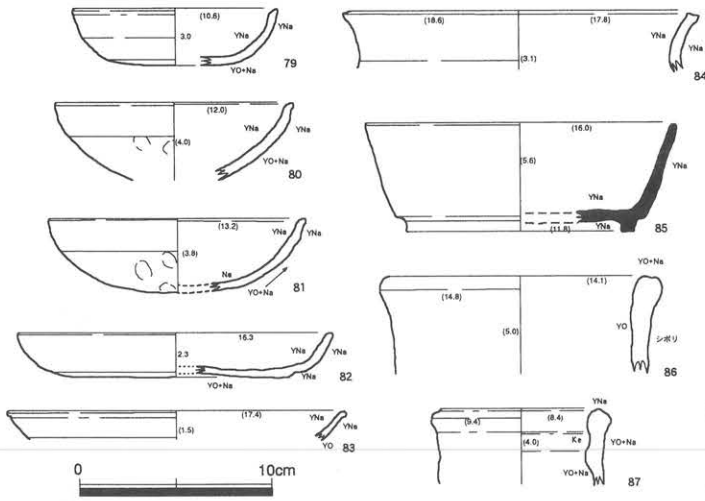


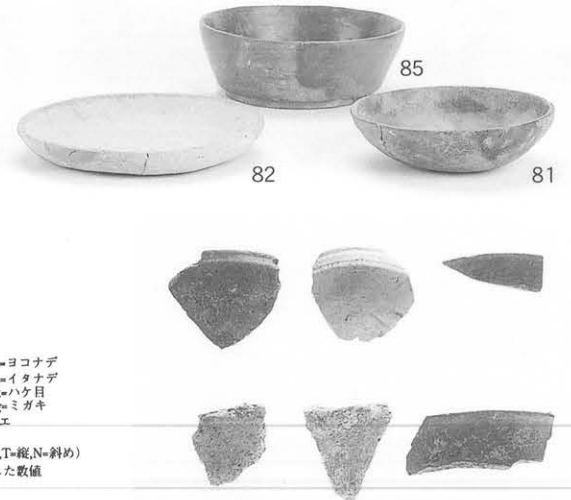
図84 土取り穴北壁
柱状断面図



凡例
Na=ナデ YNa=ヨコナデ
Am=暗文 INa=イタナデ
NM=布目 Hk=ハケ目
Ke=ケズリ Mg=ミガキ
YO=ユビオサエ
→の後 / =方向 (Y=横,T=縦,N=斜め)
()内は復元した数値

図85 土取り穴出土遺物
(下右)

図86 土取り穴出土遺物実測図
(下左)



3.4.1 土取り穴の層序

土取り穴の層序は以下の通りである。

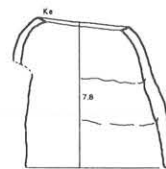
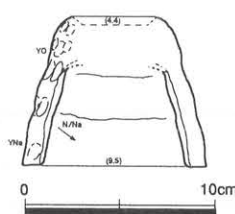
- 1層 盛り土 (造成以前にうたれた土間コン含む) 層厚約0.5m
- 2層 7.5YR6/6橙色粗砂から中粒砂
- 3層 5YR5/2灰オリーブ色粗砂混シルト
- 4層 10YR4/4暗緑灰色粗砂混シルト
- 5層 5G4/1暗緑灰色細砂混シルト質粘土
- 6層 10GY4/1暗緑灰色粘土
- 7層 5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト
- 8層 5Y3/1オリーブ黒色炭混シルト (土器多量に含む層)
- 9層 5BG4/1暗青灰色粘土

3.4.2 遺構と遺物

掘削トレンチの位置が、Pit.1とPit.2との間であり、攪乱でデータの無いPit.2東部の堆積環境に代わって、柱状図だけでも残せたのは幸いであった。

発掘調査時に行う掘削ではなく、土取り用に掘削されたため、平面・断面ともに不整形で、面的に遺構や遺物の検出は不可能であった。ただ断面略図の作成時に、北壁で1層下面に土壌状の落ち込みを、5層下面で溝らしい落ち込みを確認した。各遺構とも断面の中には、遺物の出土は認められず、全体の規模や形状も明らかではない。

図 87 土取り穴出土、
ミニチュア竈実測図



凡例
 Na=ナデ YNa=ヨコナデ
 Am=罫文 INa=イタナデ
 NM=布目 Ke=ケズリ
 Hk=ハケ目 Mg=ミガキ
 YO=ユビオサエ
 +=の後
 /=方向 (Y=横,T=縦,N=斜め)
 88 ()内は復元した数値

図 88 土取り穴出土、
ミニチュア竈



遺物が最も多く出土したのは8層からで、直上および直下の7層や9層からの出土はほとんど認められない。

出土した遺物は、須恵器坏身・蓋・壺・甕、土師器高坏・皿・坏・甕・椀・ミニチュア竈・墨書土器片、製塩土器などであった。(図85～90)

遺物は重機掘削の合間をぬって採取したため、安全確保を第一に考え、出土位置や層位などは大まかな部分でしか把握していない。したがって、多量に出土した遺物が、遺構内か包含層内か、また、上下の層位からの混入かなどの判断はできなかった。

出土した遺物の遺残状態は比較的良好で、ローリングを受けた形跡は認められない。このことから、比較的近隣に、これらの遺物を当時使用していた集落などが、存在するものと考えられる。

北壁断面では遺物が多く出土する層位(8層)下面に、遺構は認められなかったが、他のトレンチの状況を見ても、当該面に遺構の存在は否定できない。

4 まとめ

4.1 遺構

Pit.2では攪乱坑壁面のTP+4.3m付近で、約0.7mの砂層の堆積を確認した。この砂層の下位は粘土層であり、その上面に人間の踏み込みと思われるくぼみが認められた。粘土層内からは、弥生時代後期の高坏などが出土したことから、上面の踏み込み状くぼみ、及び上位の砂層は弥生時代後期以降のものであることがわかる。しかし、これら砂層・粘土層ともに計画深度を超えた部分であり、調査をおこなっていないことから、その範囲・規模など詳細は不明である。

同様に東側(Pit.4)では側溝の下部(おおよそTP+4.7m付近)で、同時期と考えられる砂層を検出しているが、層厚は確認していない。砂層上面のレベルは、西側での検出面と比べ約0.4m高い。このレベルの違いが、地形的なものなのか、削平などの人為的なものなのかは、Pit.4では砂層の底を確認していないため、不明である。しかし今回のレベル差は、航空写真から判読された調査地近辺の地形が、東から西に向かった傾斜地形であることから、時期は明らかにできないが、地形の形成に要因があると考えられる。

今回の調査では、各時期を通じて居住域を示すと思われる遺構(例えば柱穴)は、非常に少なかった。一方、溝はさまざまな規模や方向のものを検出した。このことから、当地は、集落の縁辺部、主に生産域であったと考えられる。

鋤溝と考えられるPit.4で検出した溝は、基本的には東西方向であったが、検出面によって(すなわち時期によって)少しずつ方向を違えていた。この地域は、坪名の名残と考えられる字名が遺存していることから、古くからの条里を引き継いでいると言われ、府教委の調査では飛鳥～奈良時代まで遡るとも考えられている。今回の調査地は、旧友井村の南東隅にあたり、明治18年の大日本帝国陸地測量部測量の仮製図を見ると、集落の一面になっておりすでに条里は失われている。昭和36年の航空写真では、旧中環に沿った西側の部分の区画がかなり乱れており、友井集落周辺の条里復元は不可能である。

今回検出した溝が、条里に規制されたものと考えれば、奈良時代末から近世以前は、時代によって若干の方向の違いは見られるものの、条里を踏襲した地割りであったと考えられる。しかし、最後に当地周辺の地形を変形させた要因と考えられる、最上位で認められた河川堆積物は、近世以降(大和川付け替えまで)の分流路の活動によって堆積したものであり、その堆積作用によって形成された新たな土地には、従前の土地区画(条里地割り)を放棄して、集落を形成したことがわかる。

Pit.1やPit.2で検出した溝121や溝124は、出土遺物や構造などの点で今後検討の余地を大きく残した。今後類例の増加及び、近隣の新たな調査成果の増加に期待したい。

Pit.2では南断面で、明瞭な西落ちの段が認められた。第3面の中央やや西よりで検出した西に落ちる段は、その規模は明瞭ではないが、段の上下で溝の方向が違うなど、土地の利用条件の変更が意図的に行われていることは明らかである。段は、上位面のほぼ同じ場所でも認められる。西落ちの傾斜地形を利用し、東側の高い部分では畑、西側の低いところでは田圃として利用したのか、もしくは、元々低い西側に、段を作ることでより低め、排水を良好にして、東側の耕作地を安定させたのであろうか。土壌の自然化学分析を行っておらず、段の上下での植生復元ができないため、現時点では推測の域を出ない。

4.2 遺物

今回の調査では、9世紀を中心とした時期の遺物が多く出土した。各トレンチを通じて見ると、土師器に対して須恵器の出土が少ない。また特に、土師器甕の出土が非常に少なく、口径を復元できるものは、Pit.4以外にほとんど出土しない。

以下に出土遺物で特徴的なものをあげる。

Pit.1の4層から出土した土師器碗(21)は、表面の摩滅が著しく、調整などの詳細は不明であるが、灰白色の胎土に、赤色のいわゆるクサリ礫を含む、やや粗めの混和材が入る。形や法量は9世紀前半の特徴を有するが、胎土から河内地方以外で作られた可能性が考えられる。

Pit.1の9層から出土したロクロ土師器(51)は、灰白色で、体部に雲母を含む。外面は丁寧に回転ヘラケズリを施す。内面口縁部にはケズリを施すが、見込みの部分は段を持ちナデで調整する。9世紀初頭の特徴を有する遺物と供伴する。(図49)

墨書土器は、Pit.1の溝121より出土した坏と碗の3個体(27・30・31)と、土取

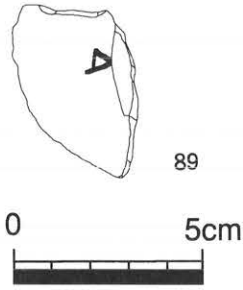


図 89 土取り穴出土墨書土器
(左)

図 90 土取り穴出土墨書土器
実測図 (右)

り穴から出土した坏もしくは皿の底部の破片(89)の計4点である。腕に書かれた文字は、「四口」(31)と何か漢字の一部であるが判読不明(30)であった。坏(27)に書かれた文字は鮮明で、横に二文字「四小」であった。当時文字は右読みの縦書きであり、横書きに意味のある熟語として書かれたとは考えられない。拙稿(池崎1999)では2文字目が左へずれる文字の位置から、「小」の字は後からの付け足しと考えた。おそらく「小」の字は当時、独立して使用される場合と、上に「四」のような漢数字をつけて使用する場合とでは、認識される意味に大きな違いがあったものと考えられる。

周辺地域から出土する墨書土器には、「四」や「小」の文字を含み、その意味の分かる資料はほとんどない。

墨書の意味の解明は今後の課題とするが、器形・書き手が共に違うものの、「四」という共通した漢数字の書かれた土器が、同一遺構内から複数個出土したことから、最低限「四」が、識別記号として通用する共通認識と、墨書を識別対象に施すことが可能な人材・道具(筆記具)などが、当時の調査地周辺には浸透していたことは明らかである。しかし残念ながら、遺物として筆記具などの出土はない。

墨書の意味の解明は今後の課題とするが、器形・書き手が共に違うものの、「四」という共通した漢数字の書かれた土器が、同一遺構内から複数個出土したことから、最低限「四」が、識別記号として通用する共通認識と、墨書を識別対象に施すことが可能な人材・道具(筆記具)などが、当時の調査地周辺には浸透していたことは明らかである。しかし残念ながら、遺物として筆記具などの出土はない。

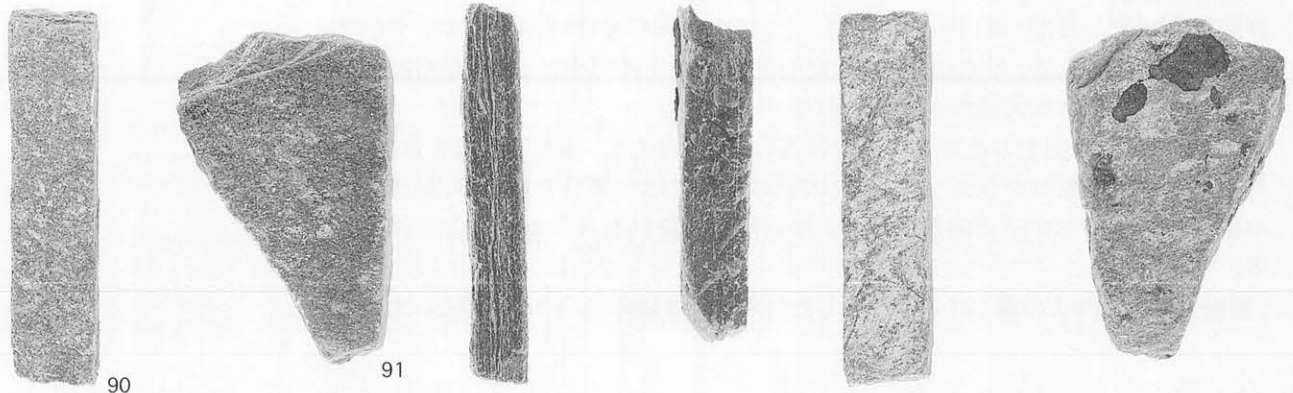
溝121出土遺物の年代観について

個々の出土遺物を見ると、溝121に与えた9世紀前半という時期より、若干古い様相を呈する(特に坏27など)。しかし土師器碗の形態に注目して、9層から出土した土師器の碗48・49と比較すると、溝121出土の碗29・31の方が小型化していることから、9層出土遺物より若干新しいと考えられる。したがって非常に短い時間幅ではあるが、9層を9世紀初頭以降、溝121を9世紀前半ごろと考えられる。ただし、なぜ墨書土器27のような古い形態が、新しい碗30・31の形態と共存するのかという問題は、今後の検討課題としたい。

Pit.1の4層(92)とPit.2の33層(91)から、柱状および扁平に加工された石材が出土した(90・91)。

90は層理にそって面取りし、側面も丁寧に面取りする。上下端部は折れているが、欠損したのではなく、折り取ったまま未整形である。91は層理にそって面取りし、側面は一方のみ平滑に仕上げる。もう一方は未整形。上下端部が90と同様未整形。石材は片岩で、遺跡周辺及び以南の地方でこれらの石材が採れるところはなく、近郊で言えば産出地は丹波周辺と考えられる。産地・材質・加工および複数あるという点からみて、単なる混入とは考えられない。この石材の用途を考えると、表面の平滑さが欠けることや、材質から砥石とは考

図 91 加工石材



えられない。鋼鉄と打ち合わすと、火花が出やすい性質から、発火材的な使われ方をしたのかもしれない。

最後に、今回は集落そのものを示す遺構（例えば掘立柱建物や井戸など）は見つかっていない。しかし、遺物の出土状況などから、集落の居住区域は、未調査のマンション本体部分を含む、調査トレンチの南東に隣接して広がる可能性が考えられる。

当該時期は、周辺の調査成果でもデータが少ない時期であり、今回の成果が集落の変遷を考えるデータの一つとなれば幸いである。

参考文献

- 荻田昭次・藤井直正・竹下賢『池島町の条里遺構―調査概報―』 東大阪市遺跡保護調査会 1973年
- 亀島重則・阪田育功・中井貞夫・井藤暁子・バリノサーヴェイ・山口誠治『友井東（その1）近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1984年
- 生田維道・上西美佐子・宮野淳一・中西靖人・バリノサーヴェイ・嶋倉巳三郎『友井東（その2）近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1983年
- 渡辺昌宏・井藤暁子・小野久隆・岡本敏行・山口誠治・野藤和也・築瀬和孝・進藤武・萬谷幸美・山藤見・崎谷忠弘『美園 近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1985年
- 三宅正浩・粉川昭平・藤下典之『佐堂（その1）近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1984年
- 阪田育功・森屋直樹・井藤暁子・中井貞夫・山口誠治・山田治・バリノサーヴェイ『佐堂（その2）―I 近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1984年
- 布施市史編纂委員会『布施市史』 第一巻 布施市役所 1962年
- 渡辺昌広「古墳発掘よもやま話 美園遺跡を調査して」『八尾あれこれ文化財講座記録集2』（財）八尾市文化財調査研究会報告21 財団法人八尾市文化財調査研究会 1988年
- 地学団体研究会大阪支部『大地のおいたち』築地書館 1999年 P.147～194
- 八尾市埋蔵文化財分布図 昭和63年改訂
- 成海佳子「美園遺跡（第1次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告39』 財団法人八尾市文化財調査研究会 1993年
- 岡田清一「美園遺跡（第2次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告39』 財団法人八尾市文化財調査研究会 1993年
- 高萩千秋「美園遺跡（第3次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告50』 財団法人八尾市文化財調査研究会 1996年
- 西村公助「美園遺跡（第4次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告53』 財団法人八尾市文化財調査研究会 1996年
- 八尾市教育委員会『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』 八尾市文化財調査報告7 1981年
- 米田敏幸「美園遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』 八尾市教育委員会 1983
- 村上年生・小野久隆・赤木克視・中西靖人・山口誠治・石神幸子・坂田育功・田中和弘・岸本道昭・金光正裕・陣内暢子・杉本二郎・入江正則・日下雅義・服部昌之・原秀禎・安田喜憲・嶋倉巳三郎・川村三郎・野口寧世『河内平野遺跡群の動態I 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―プロローグ編―』 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1987年
- 池崎智詞「美園遺跡出土の墨書土器新資料」『光陰如矢―荻田昭次先生古稀記念論集―』「光陰如矢」刊行会 1999年
- 積山洋「律令制期の製塩土器と塩の流通―摂河泉出土資料を中心に―」『ヒストリア』第141号 大阪歴史学会 1993年

報告書抄録

よみがな きょうどうじゅうたくけんせつこうじにともなうみそのい
せきだい1じはっくつちょうさほうこく

書名 共同住宅建設工事に伴う美園遺跡第1次発掘調査報告

副書名

巻次

シリーズ名

シリーズ番号

編著者名 池崎智詞

編集機関 財団法人東大阪市文化財協会

所在地 〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21

発行年月日 2001年3月31日

所収遺跡名 美園遺跡 (みそのいせき)

所在地 東大阪市友井4丁目832番地

コード 市町村27227

北緯 34° 38' 15"

東経 135° 35' 06"

調査期間 1996年4月16日～6月5日

調査面積 259m²

調査原因 共同住宅建設

種別

時期 奈良時代末から平安・鎌倉時代

遺構 溝・ピット・耕作地跡ほか

遺物 弥生土器・墨書土器・ロクロ土師器・製塩土器ほか

特記事項 板と杭を使用した、L字形の溝

共同住宅建設に伴う

美園遺跡第1次発掘調査報告

2001年3月31日

発行 財団法人東大阪市文化財協会

〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21

電話 06-6736-0346

印刷 株近畿印刷センター
